

0001

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：基礎

活動の順序付けを行う主な目的として、最も適切なものはどれか。

ア：全ての活動を同時開始できるようにする。

イ：全活動の担当者を同じ人数にそろえる。

ウ：全活動の期間を同じ長さにする。

エ：活動間の論理的な関係や依存関係を明らかにし、現実的なスケジュールを作成できるようにする。

答え・解説

正答：エ

ア：依存関係がある活動を無理に同時開始すると実行不可能な計画になる。

イ：人数の均等化は順序付けの目的ではなく、資源計画の論点である。

ウ：活動期間は作業内容や資源などにより異なり、順序付けで均一化するものではない。

エ：活動順序付けでは、先行・後続関係や外部依存などを明確にし、実行可能なスケジュールの基礎を作る。

総合解説：順序付けは、活動間の論理関係を可視化して、クリティカルパスや必要な予備を検討できる状態にする工程である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0002

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：基礎

プロジェクトの活動をネットワーク図で表す効果として、最も適切なものはどれか。

ア：プロジェクトの目的を変更する。

イ：成果物の品質基準を自動的に決定する。

ウ：契約形態を自動的に選択する。

エ：活動間の関係を図式化し、クリティカルパスや順序上の制約を分析しやすくする。

答え・解説

正答：エ

ア：ネットワーク図は目的変更の手段ではなく、スケジュール論理の可視化手段である。

イ：ネットワーク図は主に活動の順序関係を分析するもので、品質基準を決定するものではない。

ウ：契約形態は調達計画で判断する論点である。

エ：IPAシラバスは、ネットワーク図などを用いて全活動の関係を明らかにし、クリティカルパスや予備を決定できるようにしている。

総合解説：ネットワーク図は活動の依存関係を可視化し、日程計画の妥当性やクリティカルパスを分析する基礎となる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0003

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

外部機関から認証キーが発行されないと結合試験を開始できない。順序付けとして最も適切な対応はどれか。

ア：結合試験を先に完了したことにして、後から認証キーを取得する。

イ：認証キー発行を外部依存として明示し、その完了を結合試験開始の前提条件としてスケジュールに反映する。

ウ：外部依存を無視して全活動を並列化する。

エ：外部作業は自社の管理外なので、スケジュールには記載しない。

答え・解説

正答：イ

ア：前提条件を満たさずに活動を完了扱いにするのは不適切である。

イ：外部との依存関係も活動順序に含め、現実的な開始条件として扱う必要がある。

ウ：物理的・論理的な依存を無視した並列化は実行不可能な計画になる。

エ：管理外でも依存するなら日程への影響要因として明示する必要がある。

総合解説：外部依存はプロジェクトの統制範囲外でも、開始・終了条件に影響するためネットワーク上で明示して管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0004

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

データ移行後でなければ移行結果の照合を実施できない。最も適切な順序付けはどれか。

ア：照合をデータ移行より必ず先に完了させる。

イ：データ移行の完了後に照合を開始する関係として設定する。

ウ：両活動の関係を設定せず、担当者の判断だけに任せる。

エ：二つの活動を一つのマイルストーンとして扱い、期間をゼロにする。

答え・解説

正答：イ

ア：結果が存在しない段階では照合できないため、論理関係に反する。

イ：照合は移行結果を入力として必要とするため、論理的に移行完了が先行条件となる。

ウ：依存関係を明示しないと現実的なスケジュールを作成できない。

エ：実作業である活動をマイルストーンに置き換えるのは不適切である。

総合解説：順序付けでは、成果物や入力・出力の関係から論理的な先行条件を見極める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0005

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

設計書の全章完成を待たず、完成した章から順にレビューを開始して日程を短縮したい。
この考え方に最も近いものはどれか。

ア：先行活動完了後に一定期間待ってからレビューを開始する。

イ：レビュー活動そのものを削除する。

ウ：依存関係を全て解除し、無条件で同時開始する。

エ：後続活動を先行活動の完了前に一部開始できるよう、適切なリードを設定する。

答え・解説

正答：エ

ア：これは待ち時間を設けるラグの考え方であり、日程短縮とは逆方向である。

イ：品質活動を削除することは、順序調整ではない。

ウ：リードは論理関係を維持したうえで重なりを許すもので、依存を無視するものではない。

エ：リードは、論理的に許される範囲で後続活動を早めるための調整である。

総合解説：リードは活動の重なりを許容して日程を前倒しする調整であり、品質・手戻りリスクを踏まえて設定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0006

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

塗装後、乾燥のため24時間待ってから検査を開始する必要がある。順序関係の表現として最も適切なものはどれか。

ア：塗装と検査の依存関係を削除する。

イ：塗装完了から検査開始までに24時間のラグを設定する。

ウ：乾燥時間をマネジメント予備に置き換える。

エ：検査を塗装より24時間早く開始するリードを設定する。

答え・解説

正答：イ

ア：物理的な待ち時間があるため依存関係を明示すべきである。

イ：ラグは先行活動と後続活動の間に必要な待ち時間を表す。

ウ：乾燥は既知の工程上の待ち時間であり、予備費の概念ではない。

エ：乾燥待ちが必要なので前倒しはできない。

総合解説：ラグは、物理的・技術的な理由などにより後続活動の開始を遅らせる必要時間を表現する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0007

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：基礎

活動Aが完了しなければ活動Bを開始できない関係として最も適切なものはどれか。

- ア：Start-to-Start (SS) である。
- イ：Finish-to-Start (FS) である。
- ウ：Start-to-Finish (SF) である。
- エ：Finish-to-Finish (FF) である。

答え・解説

正答：イ

ア：SSは先行活動の開始を基準に後続活動を開始できる関係である。

イ：FSは先行活動の終了後に後続活動を開始する論理関係である。

ウ：SFは先行活動の開始を後続活動の終了条件とする関係で、該当しない。

エ：FFは終了時点同士の関係である。

総合解説：活動間の論理関係を正しく表現すると、ネットワーク図と日程計算の妥当性が高まる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0008

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：基礎

活動Aの開始後に活動Bも開始できるが、Aの完了を待つ必要はない。最も適切な関係はどれか。

- ア：活動間に関係を設定しない。
- イ：Start-to-Start (SS) である。
- ウ：Finish-to-Finish (FF) である。
- エ：Finish-to-Start (FS) である。

答え・解説

正答：イ

ア：開始条件が存在するため、論理関係を設定する必要がある。

イ：SSは一方の活動の開始を基準に、他方の活動を開始できる関係である。

ウ：FFは終了時点同士の関係であり、開始条件を表していない。

エ：FSではAの完了までBを開始できない。

総合解説：複数の論理関係を使い分けることで、現実の作業の重なりや制約をネットワーク図へ正確に反映できる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0009

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

担当者の都合だけを理由に、全ての活動へ固定開始日を設定した結果、日程変更には弱い計画になった。改善策として最も適切なものはどれか。

ア：ネットワーク図を廃止して口頭調整だけにする。

イ：本当に必要な論理・物理・外部制約だけを残し、不要な固定日を減らして依存関係に基づく計画にする。

ウ：固定開始日をさらに増やして全活動を完全固定する。

エ：依存関係を全て削除し、日付だけで管理する。

答え・解説

正答：イ

ア：複雑な依存関係は可視化して管理する方が合理的である。

イ：過度な日付制約はネットワークの柔軟性を損ない、クリティカルパス分析をゆがめることがある。

ウ：不要な制約を増やすと変化への対応力がさらに低下する。

エ：活動順序の論理性が失われ、現実的なスケジュールにならない。

総合解説：スケジュールの制約は必要最小限にし、論理関係を中心に計画することで変更時の影響分析を行いやすくする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0010

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：標準

要件確定後に、互いに依存しない二つの機能の詳細設計を行う。資源も別々に確保できている。最も適切な順序付けはどれか。

ア：要件確定を共通の先行条件とし、その後の二つの詳細設計は並列に配置する。

イ：二つの設計を必ず直列にする。

ウ：要件確定前に両設計を完了扱いにする。

エ：二つの設計を同じ活動として統合し、依存関係を見えなくする。

答え・解説

正答：ア

ア：相互依存がなく資源も確保できるなら、共通先行条件後に並列化することで日程短縮が可能である。

イ：不要な直列化はプロジェクト期間を長くする可能性がある。

ウ：共通の先行条件を満たしていない。

エ：独立した活動は分けて管理した方が進捗と影響を把握しやすい。

総合解説：順序付けは、必要な依存だけを設定し、独立活動は資源条件を確認したうえで並列化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0011

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：応用

外部レビューが当初の「開発完了後」から「開発途中の中間成果物でも実施可能」に変更された。プロジェクトマネージャの対応として最も適切なものはどれか。

ア：レビュー自体を削除し、日程だけ短縮する。

イ：レビューを開発開始前に完了したことにする。

ウ：新しい依存条件を確認し、レビューを一部前倒しできる関係へネットワークを更新し、手戻りや品質への影響も評価する。

エ：元の順序を絶対に変更せず、短縮可能性を検討しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：品質確保の目的を損なうため不適切である。

イ：利用可能な中間成果物がない段階では合理的でない。

ウ：依存条件の変更はスケジュール短縮の機会になり得るが、前倒しによるリスクも含めて評価する必要がある。

エ：前提が変わった場合はネットワークを見直すべきである。

総合解説：活動順序は固定物ではなく、前提・制約・依存条件が変化したときに更新し、全体影響を評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0012

3-1 スケジュール計画 > 活動の順序付け・ネットワーク図 | 難易度：応用

一つの共通基盤作業Cの完了を、三つの後続作業D・E・Fが待っている。Cが遅れる可能性が高い。最も適切な対応はどれか。

ア：Cの遅延が複数経路へ波及することをネットワークで確認し、Cの依存・期間・資源・予備を重点的に見直す。

イ：Dだけを確認し、EとFへの影響は考慮しない。

ウ：後続作業を全て完了扱いにして予定日を維持する。

エ：Cの遅延をネットワーク図から削除して見えなくする。

答え・解説

正答：ア

ア：多数の後続活動が依存する活動は全体影響が大きいので、ネットワーク分析で重点管理する価値が高い。

イ：一つの遅延が複数経路へ波及するため全体を見る必要がある。

ウ：実績と計画を偽ることになり不適切である。

エ：リスクを見えなくしても影響は消えない。

総合解説：ネットワーク図は、遅延の波及経路と管理上重要な活動を特定し、予防的な見直しを行うためにも利用する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0013

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：基礎

活動期間の見積りで考慮すべき要因として、最も適切なものはどれか。

ア：利用可能な資源の量と種類、担当者の能力、日程計画、活動間の関係、学習曲線などである。

イ：プロジェクト名の文字数だけである。

ウ：全活動を常に同じ日数とするルールだけである。

エ：会議資料の表紙デザインだけである。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは、活動期間が資源、能力、日程、学習曲線などの影響を受けるとしている。

イ：名称は活動期間の主要な見積り要因ではない。

ウ：活動ごとに必要時間は異なり、要因に基づいて見積もる必要がある。

エ：表紙デザインは通常、活動期間の本質的な見積り要因ではない。

総合解説：活動期間は単純な作業量だけでなく、資源の可用性・能力や作業関係など複数要因を考慮して見積もる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0014

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：基礎

ある作業は40人時と見積もられている。活動期間を決める際の考え方として最も適切なものはどれか。

ア：工数は期間見積りに一切関係しない。

イ：40人時なら必ず40日とする。

ウ：40人時なら人数を無限に増やせば期間は必ずゼロに近づく。

エ：40人時だけで期間を自動決定せず、投入可能人数、並行可能性、日程、能力などを考慮して期間を見積もる。

答え・解説

正答：エ

ア：工数は重要な入力の一つだが、それだけでは期間を決定できない。

イ：1日当たりの投入時間や人数などを無視している。

ウ：分割できない作業や調整コストがあるため、人数と期間は単純反比例しない。

エ：工数と暦上の期間は同一ではなく、資源条件や作業の分割可能性に左右される。

総合解説：活動期間は作業量を時間軸へ変換した値であり、資源可用性や並行性を踏まえて現実的に見積もる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0015

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：標準

専門家が週2日しかプロジェクトに参加できない活動について、見積り時の対応として最も適切なものはどれか。

ア：専門家の利用可能日を日程計画へ反映し、実際に作業できる日を基に活動期間を見積もる。

イ：専門家の可用性は活動期間と無関係なので無視する。

ウ：専門家が不在の日も作業完了率を同じ割合で増やす。

エ：週5日参加できる前提で期間を計算し、そのまま確定する。

答え・解説

正答：ア

ア：活動期間は資源の利用可能性に影響されるため、カレンダーを考慮する必要がある。

イ：必要資源が使えない日は作業できないため、期間に直接影響する。

ウ：実作業と一致しない進捗計画になる。

エ：現実の可用性と合わず、遅延を内在させる。

総合解説：期間見積りでは、必要な資源が実際に利用できる時間帯・日付を反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0016

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：標準

新しい開発ツールを初めて使うチームが、同種作業を20回繰り返す。期間見積りとして最も適切な考え方はどれか。

ア：初期は習熟に時間がかかる可能性を織り込み、反復による生産性向上も考慮して見積もる。

イ：初回から20回目まで必ず同じ時間と仮定する。

ウ：学習効果を期待して、検証なしに最後の作業時間を初回の10分の1とする。

エ：新ツールなので初回だけ期間をゼロにする。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは活動期間の要因として学習曲線を挙げている。

イ：習熟によって時間が変化する可能性を無視している。

ウ：効果は実績データなどに基づいて合理的に見積もるべきである。

エ：導入初期はむしろ学習時間が必要になることがある。

総合解説：反復作業では学習による生産性変化が起こり得るため、過去実績やチームの経験を使って現実的に見積もる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0017

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：標準

開発開始後、実績から当初想定より生産性が20%低いことが分かった。最も適切な対応はどれか。

ア：当初見積りを変更せず、実績データを無視する。

イ：最新実績とベースラインとの差を踏まえて残作業の期間を再見積りし、完了予測を更新する。

ウ：全ての実績値を当初見積りに合わせて書き換える。

エ：生産性低下を理由に、残作業の品質基準を自動的に下げる。

答え・解説

正答：イ

ア：予測精度を改善できる情報を使わないのは不適切である。

イ：IPAシラバスは更新した予測に基づく定期的な再見積りが必要としている。

ウ：実績を改変してはならず、計画側を現実に合わせて評価する。

エ：品質変更は別の意思決定であり、期間再見積りの代替ではない。

総合解説：活動期間は一度決めて終わりではなく、実績とリスクの変化に応じて再見積りする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0018

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：標準

ネットワーク分析の結果、完了予定が要求期日より5日遅く、原因はクリティカルパス上の活動Xにあると分かった。最も適切な対応はどれか。

ア：活動Xの期間見積りと資源配分を再検討し、現実的な短縮策を検討する。

イ：要求期日を満たせないことが分かっても見積りを見直さない。

ウ：クリティカルパス外の余裕が大きい活動だけを短縮する。

エ：活動Xをネットワーク図から削除する。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはクリティカルパス特定後に活動期間の見積りを再考し、必要に応じて活動を修正するとしている。

イ：分析結果を使って見積りと計画を再考すべきである。

ウ：クリティカルパスが変わらない限り、完了日短縮に寄与しない可能性が高い。

エ：必要作業を削除することは期間短縮策ではない。

総合解説：要求期日との差がある場合は、クリティカルパス上の活動を中心に期間・資源・実行方法を見直す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0019

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：応用

設計レビューが遅れているため、経営層から「人を2倍にすれば期間は半分になる」と提案された。最も適切な判断はどれか。

ア：作業の分割可能性、追加要員の習熟、調整コスト、利用可能な専門性を評価してから短縮効果を見積もる。

イ：人数を2倍にすればどんな活動でも必ず期間は半分になる。

ウ：効果进行评估せず、とにかく最大人数を投入する。

エ：資源追加は活動期間に絶対に影響しない。

答え・解説

正答：ア

ア：活動期間は資源量だけでなく能力や学習、作業関係などの影響も受けるため、単純比例とは限らない。

イ：分割不可能な作業やコミュニケーション負荷があるため成立しない。

ウ：費用対効果や資源競合を無視した配分は全体最適を損なう。

エ：分割可能な作業では短縮効果が得られる場合もある。

総合解説：期間短縮では、資源追加の効果を作業特性とチーム能力に照らして評価し、全体への副作用も考える。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0020

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：応用

新技術を用いる活動で実績データが少なく、所要期間のばらつきが大きい。最も適切な対応はどれか。

ア：最悪値だけを採用し、以後の見直しを禁止する。

イ：前提と不確実性を明示し、複数の見通しや予備を検討しつつ、PoCなどで情報を増やして再見積りする。

ウ：根拠のない最短値だけを正式見積りにする。

エ：期間が不確実なので、その活動をスケジュールから除外する。

答え・解説

正答：イ

ア：新しい情報に基づく再見積りを行うべきである。

イ：不確実な活動は単一値を断定するより、探索で情報を増やし段階的に見積り精度を高めるのが合理的である。

ウ：不確実性を無視すると過度に楽観的な計画になる。

エ：必要活動なら不確実性を管理しながら計画に含める必要がある。

総合解説：不確実性の高い活動は、前提・幅・予備を明示し、探索と実績によって継続的に見積りを改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0021

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：基礎

活動期間を短縮する施策を検討するとき、最も適切な考え方はどれか。

ア：短縮による納期効果だけでなく、追加コスト、品質、手戻り、資源競合などの影響も評価する。

イ：短縮できるなら追加コストはいくらでもよい。

ウ：短縮策では品質やリスクへの影響を考えなくてよい。

エ：一度決めた期間は、状況が変わっても絶対に変更しない。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは活動期間見積りにおけるトレードオフの調整を求めている。

イ：プロジェクト目標全体のバランスを考える必要がある。

ウ：短縮が手戻りや品質低下を招く可能性がある。

エ：実績やリスクに応じて再見積りが必要である。

総合解説：活動期間の最適化は、時間だけでなくコスト・品質・資源・リスクとのバランスで判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0022

3-1 スケジュール計画 > 活動期間の見積り | 難易度：標準

顧客から「なぜこの活動に10営業日必要なのか」と質問された。最も適切な説明はどれか。

ア：担当者の勤なので説明できないと答える。

イ：顧客に長く見せるために意図的に水増ししたと説明する。

ウ：作業量、必要スキル、資源の可用性、依存関係、過去実績など、見積り要素と前提を示して説明する。

エ：前提が変わっても10日という数字だけを守ると答える。

答え・解説

正答：ウ

ア：説明可能な根拠を持たない見積りは合意形成や再評価が難しい。

イ：合理的な見積りではない。

ウ：見積りは根拠と前提を文書化し、対話で相互理解を得ることが重要である。

エ：前提変更時には再見積りが必要である。

総合解説：期間見積りは数字だけでなく、根拠・前提・制約を共有できる形にすることで合意と更新がしやすくなる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0023

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：基礎

スケジュールベースラインの説明として、最も適切なものはどれか。

ア：承認された開始・終了時期やマイルストーンを含み、実際の進捗を評価する基準となるスケジュールである。

イ：担当者の個人予定表だけを指す。

ウ：実績を記録するだけで、計画値を含まない一覧である。

エ：変更が発生したら承認なしで毎日書き換える予定表である。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスでは、活動の開始・終了を算定し、マイルストーンを設定してスケジュールのベースラインを確定するとしている。

イ：プロジェクト全体を管理する基準であり、個人予定表ではない。

ウ：ベースラインは計画と実績を比較するための承認済み基準である。

エ：ベースライン変更には統制された手続が必要である。

総合解説：スケジュールベースラインは、進捗・差異・完了予測を評価する基準となる承認済み計画である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0024

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：基礎

要求事項が変化しやすく、6か月先の活動を詳細に決めることが難しい。最も適切なスケジュール作成はどれか。

ア：スケジュールを一切作成せず、毎日その場で決める。

イ：優先度の高い要求に関わる近い活動を具体化し、要求が確定するに伴って後続活動を段階的に追加・更新する。

ウ：優先順位を無視し、作りやすい活動だけを先に並べる。

エ：6か月先まで根拠なく日単位で固定し、変更を禁止する。

答え・解説

正答：イ

ア：段階的であっても優先活動の計画と見通しは必要である。

イ：IPAシラバスは、不確実性が高い場合に優先順位の高い要求から段階的にスケジュールを作成する考え方を示している。

ウ：顧客価値や要求の優先度を反映する必要がある。

エ：不確実性を無視した過度な詳細化は計画の形骸化を招く。

総合解説：不確実な環境では、詳細化の時期を調整し、価値の高い活動から計画して継続的に更新する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0025

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：標準

開始後、A（3日）とB（5日）を並行して実施し、A完了後にC（4日）、B完了後にD（2日）を実施する。CとDの両方が完了すると終了する。最短完了日数とクリティカル経路の組合せとして正しいものはどれか。

ア：4日で、Cだけがクリティカルである。

イ：5日で、Bだけがクリティカルである。

ウ：7日で、A→CとB→Dの両経路がともにクリティカルである。

エ：9日で、A→B→C→Dがクリティカルである。

答え・解説

正答：ウ

ア：Cの前にAが必要で、単独4日では完了しない。

イ：後続Dの2日を含める必要があり、5日では終了できない。

ウ：A→Cは3+4=7日、B→Dも5+2=7日で同じ最長長さになるため、両経路がクリティカルとなる。

エ：AとBは並列であり、直列に足し合わせない。

総合解説：クリティカルパスはネットワーク上で完了日を決める最長経路であり、同じ長さの経路が複数存在することもある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0026

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：標準

プロジェクトに、クリティカルパス10日と、3日の余裕をもつ別経路8日がある。別経路上の活動を1日短縮した場合の効果として最も適切なものはどれか。

ア：クリティカルパスが変わらなければ、プロジェクト全体の完了日は短縮されない。

イ：必ず全体が3日短縮される。

ウ：必ず全体が1日短縮される。

エ：全体期間は必ず1日延びる。

答え・解説

正答：ア

ア：完了日は最長経路で決まるため、余裕のある非クリティカル経路の短縮だけでは全体期間は変わらない。

イ：余裕量と短縮量を混同している。

ウ：最長経路が変わらなければ全体期間は変わらない。

エ：活動短縮そのものが延長を意味するわけではない。

総合解説：期間短縮策は、クリティカルパスへの影響を確認して選択する必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0027

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：標準

同一専門家に同じ週で二つの活動が重複割当てされ、現実には同時実施できない。最も適切な対応はどれか。

ア：二つの活動を削除して競合をなくす。

イ：資源の可用性に合わせて活動時期を調整し、必要に応じて全体期間への影響を評価する。

ウ：資源競合を無視して進捗率だけ100%にする。

エ：一人を同じ時間帯に200%稼働として計画し、そのまま実行する。

答え・解説

正答：イ

ア：必要作業を消すことは資源平準化ではない。

イ：現実的な資源配分の平準化はIPAシラバスが求める技能であり、日程延長が起こる場合もある。

ウ：実態に合わない計画・実績管理になる。

エ：実現できない資源配分である。

総合解説：資源平準化は、資源制約を現実的に反映するために活動時期を調整する手法であり、クリティカルパスが変化する可能性もある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0028

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：標準

反復型開発で、単なる作業時間よりも利用可能な機能の提供が重要である。進捗尺度として最も適切なものはどれか。

ア：作成したメール件数だけを主要進捗尺度にする。

イ：メンバーが費やした総労働時間だけで進捗を100%判定する。

ウ：会議回数だけで進捗を評価する。

エ：完成して利用可能となった成果物や、それによって提供できた価値を基準に進捗を評価する。

答え・解説

正答：エ

ア：顧客価値や成果物完成度との関係が弱い。

イ：投入時間が成果や価値に結び付いたとは限らない。

ウ：会議回数は成果物の完成を直接表さない。

エ：IPAシラバスはプロジェクトの特徴に応じ、成果物開発で創出される価値を進捗尺度とする例を示している。

総合解説：進捗尺度は、プロジェクトの目的に合う客観的な成果・価値を反映するように設定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0029

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：応用

要求期日までに10日短縮が必要である。クリティカルパス上には、追加要員で5日短縮できる活動と、一部並行化で7日短縮できる活動があるが、並行化は手戻りリスクを増やす。最も適切な判断はどれか。

ア：クリティカルパス外の活動だけを短縮する。

イ：追加コストがある施策は一切検討しない。

ウ：コスト・品質・リスク・資源制約を評価し、クリティカルパスへの効果が高く現実的な組合せを選ぶ。

エ：短縮日数だけを見て、必ず並行化だけを採用する。

答え・解説

正答：ウ

ア：完了日短縮に結び付かない可能性が高い。

イ：納期制約とのトレードオフ評価が必要である。

ウ：IPAシラバスはクリティカルパス上の活動修正と、資源配分・期間短縮の現実的な計画を求めている。

エ：手戻りリスクや他の影響を無視している。

総合解説：スケジュール短縮は、クリティカルパス上の選択肢を中心に、コスト・品質・リスクを含めて全体最適で判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0030

3-1 スケジュール計画 > スケジュール作成・クリティカルパス | 難易度：応用

プロジェクト途中で主要リスクが消失し、新たな外部依存が発生した。スケジュール管理として最も適切な対応はどれか。

ア：当初スケジュールを保存するため、変化を反映しない。

イ：最新のリスク・依存関係・進捗を反映してネットワークと完了予測を更新し、必要な変更を関係者と調整する。

ウ：消えたリスクの予備を必ずそのまま残し、新しい依存は記録しない。

エ：新しい外部依存を担当者の個人メモだけに残す。

答え・解説

正答：イ

ア：実態と乖離した計画では管理基準として機能しない。

イ：IPAシラバスは、進捗、計画変更、リスクの発生・消失、新リスクに応じてスケジュール作成を継続するとしている。

ウ：状況変化を踏まえた再評価が必要である。

エ：全体スケジュールへ反映し、影響を共有すべきである。

総合解説：スケジュールは静的な表ではなく、進捗と環境変化に合わせて予測を継続更新する管理情報である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0031

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：基礎

コスト見積りの主な目的として、最も適切なものはどれか。

ア：過去実績を使わず、毎回ゼロから勘だけで決める。

イ：利益率だけを決め、必要コストは算定しない。

ウ：全活動の予算を同額にする。

エ：各活動とプロジェクト全体を完了するために必要なコストを合理的に見積もる。

答え・解説

正答：エ

ア：市場価格や実績価格などの根拠を活用することが求められる。

イ：利益率の決定はコスト見積りそのものではない。

ウ：活動ごとに必要資源や費目が異なるため、同額にする根拠はない。

エ：IPAシラバスでは活動別コストを積算し、付帯コストや予備費等を含めて総コストを得るとしている。

総合解説：コスト見積りでは、作業・資源・単価・付帯費用・リスクなどを積み上げ、総コストの見通しを作る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0032

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：基礎

活動別のコストを見積もる方法として最も適切なものはどれか。

ア：人件費だけを見積もり、必要な製品・サービス費は必ず除外する。

イ：活動ごとの必要メンバー、資源量、資源単価などを基に積算する。

ウ：活動数だけを数え、1活動の単価は根拠なく同額とする。

エ：全活動に前年プロジェクト総額を均等配分するだけである。

答え・解説

正答：イ

ア：活動に必要な資源や付帯コストも見積り対象となる。

イ：IPAシラバスが示す基本的な活動別見積りの考え方である。

ウ：活動ごとの規模や資源差を無視している。

エ：活動特性や必要資源を反映していない。

総合解説：活動別見積りは、WBS・活動と資源計画を結び付け、必要量と単価を根拠に積算する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0033

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：標準

企画初期で仕様が粗く、高精度のコスト見積りが難しい。最も適切な対応はどれか。

ア：高精度で見積もれないのでコスト見積り自体を行わない。

イ：情報が少なくても1円単位の見積りを確定値として固定する。

ウ：初期概算を最終予算まで一切更新しない。

エ：初期は簡易な概算手法を用い、情報が増えるにつれてより精度の高い手法で段階的に見積りを更新する。

答え・解説

正答：エ

ア：意思決定に必要な概算を行い、後に精緻化する。

イ：見せかけの精密さであり、前提の不確実性を反映していない。

ウ：進捗に伴って見積り精度を高める必要がある。

エ：IPAシラバスは初期に概算を迅速に行い、進捗に伴って精度の高い手法へ変更する考え方を示している。

総合解説：見積り精度はプロジェクト段階と情報量に合わせ、前提を明示しながら段階的に改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0034

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：標準

クラウドサービスの費用を見積もる際、最も適切な根拠はどれか。

ア：数年前の価格を現在価格として無条件に使用する。

イ：担当者が好きな金額を根拠なく設定する。

ウ：利用量に関係なく常に無料と仮定する。

エ：現在の料金表、利用量見込み、類似案件の実績価格など、検証可能な単価根拠を使う。

答え・解説

正答：エ

ア：価格改定や利用条件の変化を反映できない。

イ：合理的な見積り根拠にならない。

ウ：料金体系と利用量を反映する必要がある。

エ：IPAシラバスはメンバー・資源の市場価格や実績価格に関する知識を求めている。

総合解説：コスト見積りでは、最新の市場価格と組織の実績データを使い、数量条件と結び付けて説明可能な根拠を作る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0035

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：標準

外部拠点への機器導入で、本体価格だけを見積もっている。追加確認として最も適切なものはどれか。

ア：付帯費用は発生後にだけ記録し、事前見積りしない。

イ：輸送、設置、設定、教育、保守準備など、導入に付帯して必要なコストも確認する。

ウ：本体価格以外は必ずゼロとみなす。

エ：付帯費用を品質欠陥として分類する。

答え・解説

正答：イ

ア：総コストの見通しが不十分になる。

イ：IPAシラバスはプロジェクト推進に付帯して必要なコストを特定して総コストを得るとしている。

ウ：付帯費用が発生する可能性を無視している。

エ：費用項目と品質欠陥は異なる概念である。

総合解説：総コストの妥当性には、直接作業費だけでなく導入・移行・教育などの付帯コストも含める必要がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0036

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：応用

安価なツールAはライセンス費を500万円削減できるが、手作業が増えて全体工数が1,000万円増える。高価なツールBはその逆である。最も適切な判断はどれか。

ア：ライセンス費だけが最小のAを必ず選ぶ。

イ：単一費目の安さだけでなく、プロジェクト全体の総コストと価値・リスクを比較して選択する。

ウ：比較せず、先に提案された方を選ぶ。

エ：工数だけが最小のBを必ず選び、他費用は見ない。

答え・解説

正答：イ

ア：人件費増加を含む総コストを無視している。

イ：IPAシラバスはコストに関する全体最適化と部分最適化のバランスを取る能力を求めている。

ウ：合理的なコスト意思決定にならない。

エ：一費目だけの部分最適である。

総合解説：コスト判断では局所的な削減ではなく、ライフサイクルや付帯費用を含む総コストで比較する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0037

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：基礎

積算した総コストが、プロジェクト立上げ時に示された投資上限を大きく超えた。最も適切な対応はどれか。

ア：見積り額だけを根拠なく上限まで下げる。

イ：見積り根拠を確認し、スコープ・資源・方式などの代替案を検討して、経済面の制約と整合するか再評価する。

ウ：超過を隠すため、一部費用を記録しない。

エ：上限を無視して、そのまま見積りを確定する。

答え・解説

正答：イ

ア：作業や資源の根拠を変えずに数字だけ下げるのは不適切である。

イ：IPAシラバスは総コストを立上げ時の経済面の制約や組織の予算方針を勘案して検証するとしている。

ウ：透明性を損ない、正しい意思決定を妨げる。

エ：承認条件との不整合を放置している。

総合解説：見積りは必要コストを示すだけでなく、投資制約との整合を確認し、必要ならスコープや実施方式を見直す材料にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0038

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：応用

新技術のためコスト見積りの精度が低く、変動幅が大きい。最も適切な対応はどれか。

ア：予備は用意するが、誰がどの条件で使えるかは決めない。

イ：予備を根拠なく総額の50%に固定する。

ウ：見積り不確実性を明示し、リスクに応じた予備を検討するとともに、使用手順をあらかじめ定める。

エ：不確実性を隠して一点見積りだけを確定値として示す。

答え・解説

正答：ウ

ア：使用手順を定めないと統制が効かない。

イ：予備は不確実性とリスクに応じて合理的に設定すべきである。

ウ：IPAシラバスは見積り精度が低い場合に予備費を確保し、その使用手順を定めておくとしている。

エ：意思決定者がリスクを把握できない。

総合解説：見積りの不確実性は、前提・幅・予備・使用ルールをセットで管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0039

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：標準

人件費見積りが「1人月100万円」で作られているが、稼働率や諸経費の扱いが不明である。改善策として最も適切なものはどれか。

ア：単価の定義、含有費目、稼働条件などの前提を明示し、再計算可能な形で見積りを文書化する。

イ：前提が不明なまま、数字だけを他案件へコピーする。

ウ：単価を隠すため、総額だけを提示する。

エ：100万円という数字だけを残し、前提は口頭でも説明しない。

答え・解説

正答：ア

ア：見積りの前提と根拠を明確にすると、レビューや変更時の再見積りが容易になる。

イ：条件が違えば誤差が拡大する。

ウ：合理的なレビューや合意形成ができない。

エ：見積りの再現性と監査性が低い。

総合解説：コスト見積りは金額だけでなく、数量・単価・前提・除外事項を追跡できる形で残す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0040

3-2 コスト・予算 > コスト見積り | 難易度：標準

主要資源の市場単価が15%上昇した。最も適切な対応はどれか。

ア：全ての活動コストを一律15%増やす。

イ：単価上昇を無視し、旧単価を使い続ける。

ウ：単価上昇分を品質基準の低下で自動的に相殺する。

エ：影響する活動のコストを再見積りし、総コスト、予備、予算制約への影響を評価して関係者に説明する。

答え・解説

正答：エ

ア：影響を受ける資源・活動を特定せず機械的に反映するのは不適切である。

イ：完了時コストの予測が不正確になる。

ウ：品質変更には別途の影響評価と承認が必要である。

エ：市場価格は見積り要素であり、変化した場合は関連コストと総額を再評価する必要がある。

総合解説：見積り要素が変わった場合は、影響範囲を特定して総コストと制約への影響を再評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0041

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：基礎

コスト見積りと予算作成の違いとして最も適切なものはどれか。

ア：見積りと予算作成は完全に同じ作業である。

イ：見積りは実績確定後だけに行う。

ウ：見積りは必要総コストを求め、予算作成はそのコストをどこでいつ使うかWBSや時期に配分する。

エ：予算作成ではWBSとの対応を考えない。

答え・解説

正答：ウ

ア：目的が異なり、予算は配分と時間軸を含む。

イ：計画時に必要コストを見積もる。

ウ：IPAシラバスは、見積りが総コストを決めるのに対し、予算作成はどこでいつ使うかを特定している。

エ：総コストをWBSの適切なレベルへ配分する。

総合解説：見積りは「いくら必要か」、予算は「どこで・いつ使うか」を明らかにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0042

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：基礎

コストベースラインの主な役割として、最も適切なものはどれか。

ア：将来の支出を一切変更できない法的契約そのものである。

イ：人員配置だけを示す組織図である。

ウ：実際に支払った金額だけを記録する帳簿である。

エ：承認された時間配分済み予算として、コストパフォーマンスを評価する基準になる。

答え・解説

正答：エ

ア：ベースラインは変更統制の対象だが、契約そのものではない。

イ：人員配置は資源・組織計画の論点である。

ウ：実績ではなく承認済み計画値の基準である。

エ：IPAシラバスはコストベースラインをコストパフォーマンス管理の基準としている。

総合解説：コストベースラインは、計画支出と実績・予測を比較し、差異を管理するための基準である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0043

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：標準

総コスト3,000万円を予算化する際、最も適切な方法はどれか。

ア：予算をプロジェクトマネージャ個人の口座単位で配分する。

イ：全WBS要素へ同額を機械的に配分する。

ウ：WBSの管理可能なレベルと実施時期に対応させて、各作業の予算を配分する。

エ：総額だけを示し、どの作業にいくら使うかは決めない。

答え・解説

正答：ウ

ア：WBSと活動に結び付けて管理する必要がある。

イ：作業規模や必要資源を反映していない。

ウ：IPAシラバスは総コストをWBSの該当する適切なレベルへ配分するとしている。

エ：コストパフォーマンスを作業単位で評価しにくい。

総合解説：予算はWBSと時間軸に結び付けることで、どこで差異が生じているかを追跡できる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0044

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：標準

総予算は同じでも、機器購入が4月、開発人件費が5～9月に発生する。予算作成として最も適切なものはどれか。

ア：発生時期は実績が出るまで決めない。

イ：時期を一切持たず、総額だけで管理する。

ウ：全額を4月に発生する計画として計上する。

エ：支出が発生する時期に合わせて予算を時間配分し、資金需要とコストパフォーマンスを把握できるようにする。

答え・解説

正答：エ

ア：計画時点で合理的な支出時期を設定する必要がある。

イ：時間軸がないと進捗時点の計画コストと比較できない。

ウ：実際の支出時期と一致せず、差異分析をゆがめる。

エ：予算作成では「いつコストを使うか」を特定する。

総合解説：時間配分された予算は、期間ごとの計画支出と実績を比較するための基礎となる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0045

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：標準

段階リリース型プロジェクトで、投入額だけでなく提供価値との関係を見たい。最も適切な考え方はどれか。

ア：成果物や提供価値とコストを対応付けて、プロジェクト特性に合うコストパフォーマンス尺度を設定する。

イ：計画コストを設定せず、実績だけを見る。

ウ：費用を多く使ったほど高パフォーマンスとみなす。

エ：価値を考えず、予算消化率だけを唯一の成功指標にする。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは、成果物による価値などプロジェクトの特徴に合わせた尺度を設定する必要があるとしている。

イ：基準がないと差異や効率を評価できない。

ウ：支出額の大きさは価値創出を保証しない。

エ：予算消化と成果達成は別である。

総合解説：コスト評価は「使った額」ではなく、計画と成果・価値との対応を見て判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0046

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：標準

要求事項の変更が頻繁に起こることが予想される。予算計画として最も適切なものはどれか。

ア：予算調整・変更の承認手順をあらかじめ定め、ステークホルダと合意して迅速に反映できるようにする。

イ：変更のたびに無承認でベースラインを書き換える。

ウ：変更手順は問題が起きてから初めて決める。

エ：要求変更があっても予算を絶対に見直さない。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは頻繁な変更が想定される場合に、予算を迅速に調整・変更できる手順を定めるとしている。

イ：統制された変更手続が必要である。

ウ：事前合意がないと意思決定が遅れる。

エ：実際のスコープと予算が不整合になる。

総合解説：変化の多いプロジェクトほど、予算変更を禁止するのではなく、迅速で統制された手順を事前に設計する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0047

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：基礎

正式に承認されたスコープ変更により作業とコストが増えた。コストベースラインの扱いとして最も適切なものはどれか。

ア：実際の作業は増やすが、ベースラインは永久に旧版のままにする。

イ：承認された変更手続に従って関連予算を更新し、新しいベースラインを管理基準とする。

ウ：変更分のコストを記録しない。

エ：承認前にベースラインを変更し、その後に承認を求める。

答え・解説

正答：イ

ア：計画と実態が不整合になり、差異評価が意味を失う。

イ：ベースラインは承認済み変更を反映して整合性を保つ必要がある。

ウ：コスト管理の透明性が失われる。

エ：変更統制の順序が逆である。

総合解説：承認済み変更は、スコープ・スケジュール・コストなど関連するベースラインへ整合的に反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0048

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：応用

あるWBS要素で計画500万円に対して実績650万円となった。最も適切な次の行動はどれか。

ア：単価上昇、作業量増加、手戻りなど差異要因を特定し、残作業と完了時コストへの影響を評価する。

イ：実績650万円を500万円に書き換える。

ウ：150万円超過という数字だけを報告し、原因は調べない。

エ：他のWBS要素の未使用予算を無承認で移して差異を消す。

答え・解説

正答：ア

ア：コストベースラインは単に超過を検知するだけでなく、差異原因と将来影響の分析に用いる。

イ：実績改変は不適切である。

ウ：是正や予測更新に必要な情報が得られない。

エ：予算移動には管理ルールと承認が必要である。

総合解説：差異は、原因・残作業・リスク・完了予測まで分析して管理判断につなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0049

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：応用

各部門が個別に予算を最小化した結果、共通基盤への投資が不足し、全体の手戻りが増える見込みである。最も適切な対応はどれか。

ア：全体影響を分析せず、最も声の大きい部門へ予算を集中する。

イ：共通基盤費を全て削除する。

ウ：部門別の局所最適だけでなく、プロジェクト全体の価値と総コストを見て予算配分を見直す。

エ：各部門の予算最小化を優先し、全体手戻りは考慮しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：合理的な配分基準にならない。

イ：全体効率をさらに悪化させる可能性がある。

ウ：予算はWBSや部門単位で管理しても、プロジェクト全体として最適化されている必要がある。

エ：部分最適が総コスト増加を招く。

総合解説：予算配分は、個別組織の都合だけでなくプロジェクト全体の価値・コスト・リスクで評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0050

3-2 コスト・予算 > 予算・コストベースライン | 難易度：標準

識別済みリスクへの対応費を活動・WPへ割り当てて予算化したい。最も適切な考え方はどれか。

ア：予備を担当者の自由費として扱い、使用条件を決めない。

イ：予備の根拠を示さず、余った予算を全て予備と呼ぶ。

ウ：リスク対応に必要なコンティンジェンシー予備を合理的に見積もり、該当する予算へ反映して管理する。

エ：識別済みリスクでも予備は一切計上しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：統制された使用手順が必要である。

イ：予備はリスクと不確実性に基づき合理的に設定する。

ウ：IPAはリスクを特定して引当金・予備費を予算計上する能力を求め、PMIでは識別済みリスクのコンティンジェンシー予備はコストベースラインに含まれる。

エ：対応費が必要と見込まれるなら予算上の備えが必要である。

総合解説：識別済みリスクへの備えは、リスクとの対応関係と使用条件を明確にして予算へ組み込む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0051

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：基礎

コンティンジェンシー予備の説明として、最も適切なものはどれか。

ア：予期しない全ての作業に対して経営層がベースライン外に置く予備だけを指す。

イ：識別済みのリスクに対する対応や発生時の作業に備えて、スケジュール又はコストのベースライン内に確保する予備である。

ウ：用途や発動条件を決めずに自由に使える予算である。

エ：利益を上乗せするためだけの金額である。

答え・解説

正答：イ

ア：これはマネジメント予備の説明に近い。

イ：PMIの定義では、コンティンジェンシー予備は既知のリスクへの対応のためベースライン内に確保される。IPAもリスクに備えた予備費の設定を求めている。

ウ：予備には使用手順・条件を定める必要がある。

エ：リスク対応の予備と利益は別概念である。

総合解説：コンティンジェンシー予備は、識別されたリスクに備える具体的なバッファであり、リスク対応計画と結び付けて管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0052

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：基礎

マネジメント予備の説明として最も適切なものはどれか。

ア：予見していない作業に備えて、コストベースラインに追加して管理側が確保する予備である。

イ：予算超過を隠すための未記録資金である。

ウ：識別済みリスクごとにベースライン内へ割り当てる予備だけを指す。

エ：計画した通常作業の見積り額そのものである。

答え・解説

正答：ア

ア：PMI Lexiconでは、マネジメント予備は予見していない作業のため、スケジュール又はコストベースラインに追加して管理側が確保する時間又は資金とされる。

イ：正式な管理対象として透明性をもって扱う必要がある。

ウ：これはコンティンジェンシー予備の説明に近い。

エ：通常作業の見積りと予備は区別する。

総合解説：マネジメント予備は未予見の作業に対する経営的な備えで、コストベースラインとは分けて統制する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0053

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：標準

リスク登録簿に「データ品質不良が発生する確率30%、発生時に追加クレンジングが必要」と記録されている。この備えとして最も適切なものはどれか。

ア：必ずマネジメント予備だけで対応する。

イ：通常作業費へ理由なく混ぜて、リスクとの対応関係を消す。

ウ：識別済みリスクなので、追加クレンジングに必要なコンティンジェンシー予備を検討する。

エ：リスクが発生していないので、予算上は一切考慮しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：識別済みリスクなのでコンティンジェンシー予備の対象として扱える。

イ：予備の根拠と使用条件を追跡できるようにする方が適切である。

ウ：既知のリスクに対する具体的対応費はコンティンジェンシー予備と結び付けるのが適切である。

エ：発生前に備えるのがリスクマネジメントである。

総合解説：識別済みリスクと、そのリスクに対する予備・発動条件を対応付けることで統制しやすくなる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0054

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：標準

予備費を設定した後に行うべき管理として、最も適切なものはどれか。

ア：使用できる条件、承認者、記録方法などをあらかじめ定め、ステークホルダと合意する。

イ：予備があること自体を管理者にも知らせない。

ウ：誰でも自由に使えるようにし、記録を不要にする。

エ：発生条件に関係なく期初に全額使用する。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラパスは予備費の使用手順を定め、ステークホルダと合意する能力を求めている。

イ：適切な意思決定と統制ができない。

ウ：予備が通常費へ流用され、統制できなくなる。

エ：予備の目的に反する。

総合解説：予備は金額設定だけでなく、発動条件・権限・記録・残高見直しまで含めて管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0055

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：標準

ある識別済みリスクについて、発生確率が20%、発生時の追加費用が500万円と見積もられている。単純な期待値を予備検討の一つの参考値にする場合、期待追加費用はいくらか。

- ア：20万円（発生確率20%を金額のように扱う）
- イ：500万円（発生時影響額をそのまま期待値とする）
- ウ：100万円（500万円×20%で求める）
- エ：2,500万円（影響額を発生確率で割る）

答え・解説

正答：ウ

ア：500万円×20%の計算結果ではない。

イ：これは発生時影響額であり、期待値ではない。

ウ：500万円×20%=100万円となる。これは予備額を決める唯一の方法ではないが、定量評価の参考値になる。

エ：確率を掛けるのではなく割っており、期待値計算として不適切である。

総合解説：予備額はリスクの確率・影響・相関などを踏まえて決める。単純期待値はその一つの参考指標である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0056

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：標準

全プロジェクトで一律「総コストの10%を予備」とするルールだけで予備額を決めている。改善策として最も適切なものはどれか。

- ア：予備を全廃する。
- イ：予備額の根拠は説明しない。
- ウ：識別したリスクや見積り不確実性を評価し、必要な予備額と根拠をプロジェクトごとに検討する。
- エ：全ての案件で必ず20%へ倍増する。

答え・解説

正答：ウ

ア：不確実性やリスクへの備えがなくなる。

イ：ステークホルダが妥当性を評価できない。

ウ：IPAはリスクを特定して適切な予備を設定する能力を求めるため、固定率だけに依存しない方が合理的である。

エ：固定率を変えただけで、リスクとの対応関係がない。

総合解説：予備は慣例的な比率だけでなく、リスクと不確実性の評価結果に基づいて設定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0057

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：応用

計画時には予見できなかったがプロジェクトスコープ内の追加作業が判明し、マネジメント予備を使用する必要がある。最も適切な対応はどれか。

ア：追加作業をWBSに追加せず、裏作業として実施する。

イ：所定の承認を得て必要額をベースライン側へ移し、作業・予算・変更記録を整合させて管理する。

ウ：マネジメント予備を使ったことを記録しない。

エ：担当者が承認なく直接支出し、ベースラインは変更しない。

答え・解説

正答：イ

ア：承認された作業は計画へ反映して管理する必要がある。

イ：PMIの説明では、マネジメント予備の使用は承認を得てコストベースラインへ移す形で統制する。

ウ：予備残高と変更履歴を追跡できなくなる。

エ：計画と実績の整合性が失われ、予備の統制もできない。

総合解説：マネジメント予備は自由資金ではなく、未予見作業が具体化した時点で正式な変更・予算管理へ移す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0058

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：基礎

識別済みの主要リスクが完全に消滅した。対応するコンティンジェンシー予備の管理として最も適切なものはどれか。

ア：リスク登録簿だけ更新し、予算には一切反映しない。

イ：予備残高を誰にも知らせず、自由費にする。

ウ：リスクが消えても必ず全額を使い切る。

エ：リスク状況を再評価し、不要となった予備をそのまま放置せず、ルールに従って減額・再配分の要否を判断する。

答え・解説

正答：エ

ア：リスクと予備の整合性を確認すべきである。

イ：統制が失われる。

ウ：予備の目的に反し、不要な支出を促す。

エ：リスクの変化に応じて予備の妥当性も見直す必要がある。

総合解説：予備はリスク状況と連動するため、リスクの発生・消失・影響変化に応じて残高を見直す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0059

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：応用

複数の識別済みリスクがあり、個別の最大影響額を全て単純合計すると予備が過大になる可能性がある。最も適切な考え方はどれか。

ア：全リスクの最大影響額を必ず100%単純合計する。

イ：リスク評価を行わず、前年案件と同額にする。

ウ：発生確率、影響、同時発生可能性や相関、許容度を評価して、全体として合理的な予備水準を検討する。

エ：最も小さいリスクだけを見て予備を決める。

答え・解説

正答：ウ

ア：全てが同時に最大影響で発生する前提は過度に保守的な場合がある。

イ：プロジェクト固有の不確実性を反映できない。

ウ：予備は個々の最大損失を機械的に足すのではなく、リスク評価に基づいて全体として設定する。

エ：主要リスクを無視している。

総合解説：複数リスクの予備では、個別評価だけでなく全体の分布・相関・許容度を考えて合理的な水準を決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0060

3-2 コスト・予算 > コンティンジェンシー予備・マネジメント予備 | 難易度：標準

チームが「予備が残っているので、予定していなかった便利ツールを買おう」と提案した。最も適切な対応はどれか。

ア：予備を使うために架空のリスクを登録する。

イ：予備は余った予算なので、自由に使ってよい。

ウ：提案額が小さければ記録なしで使ってよい。

エ：予備の目的と使用条件に該当するか確認し、該当しないなら通常の変更・予算承認手続で判断する。

答え・解説

正答：エ

ア：管理情報の虚偽であり不適切である。

イ：予備の目的と統制を失う。

ウ：金額の大小にかかわらずルールに従う必要がある。

エ：予備は特定のリスクや未予見作業への備えであり、余剰予算として自由に使うものではない。

総合解説：予備の透明性を保ち、通常の追加要望とリスク対応を区別して承認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0061

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：基礎

プロジェクトリスクの捉え方として最も適切なものはどれか。

ア：リスクは必ず損失だけを意味し、機会は含まない。

イ：既に発生した問題だけをリスクと呼ぶ。

ウ：目標達成にマイナスの影響を与える脅威だけでなく、プラスの影響を与える機会も含む。

エ：予算に関する不確実性だけをリスクと呼ぶ。

答え・解説

正答：ウ

ア：IPAでは機会もリスクとして扱う。

イ：リスクは潜在的な事象・状態を扱う。

ウ：IPAシラバスは潜在的リスクを機会と脅威の双方として定義している。

エ：スケジュール、品質、技術、組織など様々な目標への影響を含む。

総合解説：リスクマネジメントは損失回避だけでなく、有利な不確実性を機会として生かすことも含む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0062

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：基礎

IPAシラバスが不確かさの要因として例示するVUCAに含まれないものはどれか。

ア：Ambiguity（曖昧性）である。

イ：Volatility（変動性）である。

ウ：Uniformity（均一性）である。

エ：Uncertainty（不確実性）である。

答え・解説

正答：ウ

ア：VUCAのAである。

イ：VUCAのVである。

ウ：IPAはVUCAをVolatility、Uncertainty、Complexity、Ambiguityとして例示している。

エ：VUCAのUである。

総合解説：VUCAは変動性・不確実性・複雑性・曖昧性を表し、探索や適応的な管理が必要となる背景を整理する概念である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0063

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：基礎

リスク特定をプロジェクト開始時の一回だけで終えてはいけない主な理由はどれか。

ア：進捗や環境変化によって新しいリスクが生じたり、既存リスクの特性が変化したりするからである。

イ：実行段階ではリスクが発生しないからである。

ウ：リスク登録簿は一度作ると更新してはいけないからである。

エ：開始時に全ての未来事象を完全に予測できるからである。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはリスク特定を反復的なプロセスとしている。

イ：実行中にも新たなリスクは発生・変化する。

ウ：登録簿は新リスクや変化を反映して更新する。

エ：完全予測はできず、だからこそ反復的な特定が必要である。

総合解説：リスク特定はライフサイクルを通じて継続し、最新の状況をリスク登録簿へ反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0064

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：基礎

特定したリスクをリスク登録簿へ記録する主な目的として最も適切なものはどれか。

ア：リスクを記録した時点で自動的に消滅させるためである。

イ：問題発生後だけに責任者を追及するためである。

ウ：リスクの内容・特性・評価・対応などを追跡可能にし、関係者で継続管理するためである。

エ：全リスクの発生確率を必ずゼロにするためである。

答え・解説

正答：ウ

ア：記録は対応の基礎であり、リスクそのものを消すわけではない。

イ：目的は予防的・継続的なリスク管理である。

ウ：IPAシラバスは特定したリスクをリスク登録簿に記録するとしている。

エ：受容するリスクもあり、ゼロ化が常に合理的とは限らない。

総合解説：リスク登録簿は、リスクの可視化と評価・対応・監視を一貫して行うための管理基盤である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0065

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

新しいAI技術で要求性能を満たせるか不明で、全面開発すると失敗時の影響が大きい。最も適切な対応はどれか。

ア：小規模PoCやプロトタイプで技術的不確実性を探索し、結果からリスクを具体化して対応を決める。

イ：技術検証を一切行わず、成功すると仮定する。

ウ：不確実性を無視して全面開発を開始する。

エ：不確実だからプロジェクト全体を即時中止する。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはプロトタイプやシミュレーションなどで不確かさの影響を段階的に最小化・局所化している。

イ：不確実性をリスクとして特定できない。

ウ：失敗時の影響を不用意に拡大する。

エ：探索で不確実性を減らせる可能性を評価すべきである。

総合解説：未知が大きい場合は小さく検証して学習し、曖昧な不確実性を具体的なリスクへ変換する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0066

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

海外データ移転を含むプロジェクトでリスク特定を行う。最も適切な参加者構成はどれか。

ア：開発者一人だけで全リスクを決める。

イ：開発メンバーだけでなく、法務・セキュリティ・業務・海外拠点など関連リスクを知るステークホルダを参加させる。

ウ：ステークホルダの知見は偏るので一切使わない。

エ：リスクに関係しない人だけを集める。

答え・解説

正答：イ

ア：法令・業務・地域要因などの見落としが増える。

イ：IPAシラバスはリスク特定プロセスに必要なステークホルダを選定する能力を求めている。

ウ：多様な視点はリスク特定の網羅性を高める。

エ：必要な知識を持つ関係者を選ぶべきである。

総合解説：リスク特定では、技術・業務・法務・供給者など、リスク源に応じた関係者の知識を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0067

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

計画では「主要APIの仕様は来月確定する」と仮定しているが、相手組織から確約はない。最も適切な対応はどれか。

ア：計画に書いた時点で確定事実として扱う。

イ：その前提が崩れた場合の影響を確認し、外部依存の不確実性としてリスク登録簿へ記録・追跡する。

ウ：仕様確定が遅れても影響分析をしない。

エ：確約がないのでAPI連携自体を計画から消す。

答え・解説

正答：イ

ア：前提と事実を区別しないとリスクを見落とす。

イ：未確定の前提は将来のスケジュールやスコープへ影響するリスク源となる。

ウ：依存作業への影響があり得る。

エ：必要な機能なら依存リスクを管理しながら計画する。

総合解説：前提条件は成立確率と崩れた場合の影響を確認し、重要なものはリスクとして追跡する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0068

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

新しいクラウドサービスの正式提供が予定より早まり、導入すれば開発期間を短縮できる可能性が出た。リスク特定として最も適切な扱いはどれか。

ア：目標達成にプラスとなる可能性のある機会として特定し、条件と影響を評価する。

イ：必ず採用すると即断し、条件を評価しない。

ウ：既存計画と違うため情報を無視する。

エ：プラスの影響なのでリスク管理の対象外とする。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAではプラスの影響を与える潜在的リスクも機会として扱う。

イ：機会にも発生条件・コスト・副作用がある。

ウ：環境変化による機会を認識する必要がある。

エ：機会もリスクとして特定・評価する。

総合解説：リスク特定では脅威だけに偏らず、価値向上や期間短縮につながる機会も可視化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0069

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

外部委託先に本番相当データを渡してテストする計画である。リスク特定として最も適切なものはどれか。

ア：情報漏えい、アクセス権、契約上の取扱い、匿名化の不足などをプロジェクトリスクとして特定する。

イ：漏えい起きてから初めてリスク登録する。

ウ：テストデータなのでセキュリティリスクは存在しないとみなす。

エ：委託先に渡した時点で自社のリスクではなくなる。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはリスク特定に情報セキュリティ知識を含めている。

イ：発生前に潜在リスクとして特定する必要がある。

ウ：本番相当データなら漏えい等の影響があり得る。

エ：委託してもプロジェクト目標への影響は残る。

総合解説：セキュリティは技術問題だけでなく、法務・契約・運用を含むプロジェクトリスクとして扱う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0070

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：応用

複数システム・複数組織が相互依存し、一つの変更がどこへ波及するか予測しにくい。最も適切な不確実性への対応はどれか。

ア：相互依存が複雑なのでリスク特定を諦める。

イ：最初に作った単純な因果関係だけを絶対視し、観察結果を無視する。

ウ：全システムを一度に変更して結果を見る。

エ：相互関係を可視化し、小さな実験・段階的導入・観察を行って影響を学習しながらリスクを具体化する。

答え・解説

正答：エ

ア：探索で不確実性を段階的に減らすべきである。

イ：複雑性では新しい相互作用が明らかになる可能性がある。

ウ：失敗時の影響範囲を大きくする。

エ：複雑な相互作用による不確実性には、探索的・漸進的な手法で影響を局所化する考え方が適している。

総合解説：複雑性が高い場合は、全てを事前予測しようとせず、影響範囲を小さく保ちながら学習する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0071

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：標準

主要供給者の財務状況が悪化したというニュースを得た。契約履行にはまだ影響していない。最も適切な対応はどれか。

ア：既存のリスク登録簿にないので追加は禁止する。

イ：ニュースだけで直ちに契約を解除する。

ウ：まだ問題が起きていないので何もしない。

エ：供給継続への影響可能性を新たなリスクとして評価し、必要なら登録簿へ追加して監視する。

答え・解説

正答：エ

ア：新しいリスクは随時追加する。

イ：確率・影響・代替策を評価して判断すべきである。

ウ：潜在的な影響を事前に評価するのがリスク管理である。

エ：リスク特定は進捗中に新たなリスクを認識する反復的プロセスである。

総合解説：外部環境のシグナルも継続監視し、目標へ影響し得る変化は新規リスクとして評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0072

3-3 リスク・不確かさ > リスク特定・不確かさ | 難易度：応用

利用者から「新サービスが受け入れられるか分からない」という曖昧な懸念が出た。最も適切な対応はどれか。

ア：仮説となる利用者層・利用条件・成功指標を設定し、プロトタイプや小規模リリースで検証して具体的なリスクへ分解する。

イ：利用者への確認を避け、開発者だけで受容性を決める。

ウ：受け入れられると根拠なく仮定して全面展開する。

エ：曖昧なのでリスクとして扱えないと結論付ける。

答え・解説

正答：ア

ア：曖昧性には段階的詳細化やプロトタイピングなどで情報を増やし、不確実性の影響を局所化する。

イ：顧客視点の情報を取り込む必要がある。

ウ：不確実性を放置して影響を拡大する。

エ：探索によって具体化できる。

総合解説：曖昧な不確実性は、仮説と検証を使って観測可能な条件・影響へ分解すると管理しやすくなる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0073

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：基礎

リスク評価の基本として、特定した各リスクについてまず推定するものはどれか。

ア：プロジェクト名と会議回数だけである。

イ：担当者の年齢と勤続年数だけである。

ウ：発生確率と、発生した場合にプロジェクト目標へ与える影響である。

エ：全リスクを同じ確率・同じ影響とみなす。

答え・解説

正答：ウ

ア：リスク評価要素ではない。

イ：リスクの発生確率・影響とは直接関係しない。

ウ：IPAシラバスは各リスクの発生確率と目標達成への影響を推定するとしている。

エ：リスクごとに特性を評価する必要がある。

総合解説：リスク評価は、確率と影響を基礎に、予算・スケジュール・許容度なども考慮して対応優先度を決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0074

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：基礎

多数のリスクを短時間で比較し、まず対応優先度を絞り込みたい。定性的リスク分析として最も適切な方法はどれか。

ア：リスクを評価せず、発見順に対応する。

イ：リスクの存在を記録せず、口頭だけで管理する。

ウ：発生確率と影響度を高・中・低などの尺度で評価し、優先順位を付ける。

エ：全リスクの損失額を必ず円単位で確定する。

答え・解説

正答：ウ

ア：優先順位付けのために評価を行う。

イ：評価結果は追跡できる形で管理する。

ウ：定性的分析は相対的な尺度でリスクを分類・優先順位付けする方法である。

エ：これは定量的評価に近い。

総合解説：定性的評価は、限られた情報でも比較的迅速に優先順位を付けるために使える。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0075

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：基礎

重要リスクがプロジェクトの総コストや完了日に与える影響を数値で把握したい。定量的リスク分析として最も適切な方法はどれか。

ア：リスクを赤・黄・緑だけで分類する。

イ：関係者の印象だけで順位を決め、数値を使わない。

ウ：確率分布や金額・日数などの数値を用いて、コストや完了日への影響を推定する。

エ：全リスクを無条件で同じ値にする。

答え・解説

正答：ウ

ア：これは定性的な分類の例である。

イ：定量分析では数値的な影響推定を行う。

ウ：IPAシラバスは定量的リスク分析手法に関する知識を求めている。

エ：個別の確率・影響を評価する必要がある。

総合解説：定量分析は、リスクがコストや日程へ与える影響を数値として把握し、予備や意思決定を支援する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0076

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：標準

リスクAは発生確率が高いが影響は小さく、リスクBは確率が低いが発生時の影響が甚大である。最も適切な対応はどれか。

ア：影響度だけでBを必ず最優先にする。

イ：発生確率だけでAを必ず最優先にする。

ウ：二つとも同じ対応にする。

エ：確率と影響の両方、さらに許容度や他の制約を考慮して優先順位を決める。

答え・解説

正答：エ

ア：確率や許容度も考慮する必要がある。

イ：影響度を無視している。

ウ：特性が異なるため、評価に応じて優先度と対応を選ぶ。

エ：IPAシラバスは確率・影響に加え、予算、スケジュール、主要ステークホルダの許容度などを考慮するとしている。

総合解説：リスク優先度は単一指標だけでなく、確率・影響・許容度・制約を総合して決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0077

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：標準

脅威Xは発生確率25%、発生した場合の追加コスト800万円と見積もられている。単純な期待金額価値（損失側）はいくらか。

ア：3,200万円（800万円を0.25で割る）

イ：800万円（発生時影響額をそのまま用いる）

ウ：200万円（800万円×0.25で求める）

エ：32万円（確率25%の扱いを誤る）

答え・解説

正答：ウ

ア：影響額を確率で割っており不適切である。

イ：これは発生時の影響額で、期待値ではない。

ウ：800万円×0.25=200万円である。

エ：確率と影響額の積ではない。

総合解説：期待金額価値は確率と金額影響の積で表せる単純な定量指標で、複数リスクの比較や予備検討の参考になる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0078

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：標準

ある選択肢には、40%の確率で600万円の追加便益が得られる機会と、20%の確率で300万円の追加費用が発生する脅威がある。単純期待値を「便益を正、費用を負」として計算した場合の正味期待値はいくらか。

ア：プラス900万円（確率を無視して便益と費用を単純合算する）

イ：プラス300万円（機会の期待便益だけを重視する）

ウ：プラス180万円（240万円の期待便益から60万円の期待損失を引く）

エ：マイナス60万円（脅威の期待損失だけを計上する）

答え・解説

正答：ウ

ア：確率を考慮せず影響額を単純加算している。

イ：便益の期待値だけではなく脅威の期待損失も差し引く必要がある。

ウ：600×0.4=240万円、300×0.2=60万円なので、240-60=180万円である。

エ：機会側の期待便益を無視している。

総合解説：機会と脅威を同じ評価枠組みで扱おうと、意思決定における正負両面の不確実性を比較しやすい。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0079

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：標準

同じリスクについて、開発部門は許容可能と考えているが、法務部門は法令違反の可能性があるため許容できないとしている。最も適切な対応はどれか。

ア：開発部門の意見だけを採用する。

イ：主要ステークホルダのリスク許容度と影響領域を確認し、優先順位と対応方針を再評価して合意形成する。

ウ：意見が異なるのでリスクを登録簿から削除する。

エ：法務部門の意見を聞かず、確率だけで判断する。

答え・解説

正答：イ

ア：法令リスクを持つ関係者の許容度を無視している。

イ：IPAシラバスは主要ステークホルダのリスク許容度を考慮して対応優先順位を定めるとしている。

ウ：相違を可視化して意思決定する必要がある。

エ：許容度も評価要因である。

総合解説：リスク評価では数値だけでなく、影響を受ける主要ステークホルダの許容度も重要な判断条件になる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0080

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：標準

対策実施後、あるリスクの発生確率が「高」から「低」に下がった。最も適切な対応はどれか。

ア：全てのリスクの評価を同じ値に変更する。

イ：確率が下がったので記録を全て削除する。

ウ：最初の評価を永久に固定する。

エ：最新の確率・影響を再評価し、他リスクとの優先順位や残存対応の要否を見直す。

答え・解説

正答：エ

ア：個別の特性に基づく評価が必要である。

イ：残存リスクや再発可能性を確認する必要がある。

ウ：状況変化を反映できない。

エ：IPAシラバスはリスク評価も反復的なプロセスとしている。

総合解説：リスク評価は対応実施や環境変化に応じて更新し、限られた資源を現在の優先度へ配分する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0081

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：応用

リスクが80件あり、全件を詳細な定量分析する時間はない。最も適切な進め方はどれか。

ア：定量分析ができないリスクは全て無視する。

イ：最初に見つけた1件だけを詳細分析し、他を評価しない。

ウ：まず定性的に全体をスクリーニングし、高優先度の重要リスクを中心に必要な定量分析を行う。

エ：80件全てを同じ詳細度で分析するまで意思決定を停止する。

答え・解説

正答：ウ

ア：定性的評価でも優先順位付けは可能である。

イ：全体の重要リスクを見落とす。

ウ：分析の深さは意思決定の必要性和コストに応じて選ぶのが合理的である。

エ：分析コストが過大になり、意思決定が遅れる可能性がある。

総合解説：定性分析で優先度を絞り込み、重要な意思決定に必要な対象へ定量分析を深掘りする方法は効率的である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0082

3-3 リスク・不確かさ > 定性的・定量的リスク評価 | 難易度：応用

リスクAは期待損失が200万円、リスクBは100万円だが、Bは法令違反につながる可能性があり、経営層の許容度が極めて低い。最も適切な判断はどれか。

ア：金額が小さいBは必ず無視する。

イ：AとBを無条件に同順位とする。

ウ：期待損失額が大きいAを必ず優先し、他要因は無視する。

エ：期待損失額だけでなく、法令影響やステークホルダの許容度も含めてBの優先度を高くすることを検討する。

答え・解説

正答：エ

ア：非金銭的な重大影響を見落とす。

イ：特性に応じて優先順位を決める必要がある。

ウ：法令や許容度は重要な評価要因である。

エ：IPAシラバスは金額だけでなく、スケジュールや主要ステークホルダの許容度など他要因も考慮する。

総合解説：リスク優先度は、金銭期待値に還元しにくい法令・評判・安全などの重大影響も含めて決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0083

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：基礎

納期遅延や品質低下など、目標達成にマイナスの影響を与える潜在的リスクへの対応戦略として、IPAシラバスの分類に合うものはどれか。

- ア：設計、実装、テスト、運用である。
- イ：活用、共有、強化、受容だけである。
- ウ：削除、延期、隠蔽、忘却である。
- エ：回避、軽減、転嫁、受容である。

答え・解説

正答：エ

ア：開発工程でありリスク対応戦略の分類ではない。

イ：これは主に機会への対応である。

ウ：標準的なリスク対応戦略ではない。

エ：IPAシラバスは脅威への対応として回避、軽減、転嫁、受容を挙げている。

総合解説：脅威への対応は、原因をなくす回避、確率・影響を下げる軽減、第三者へ移す転嫁、受容などから選択する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0084

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：基礎

新技術の早期利用や有利な提携など、目標達成にプラスの影響を与える潜在的リスクを生かす戦略として、IPAシラバスの分類に合うものはどれか。

- ア：中止、隠蔽、削除、放置である。
- イ：回避、軽減、転嫁、受容だけである。
- ウ：要件定義、設計、実装、試験である。
- エ：活用、共有、強化、受容である。

答え・解説

正答：エ

ア：標準的な機会対応戦略ではない。

イ：これは主に脅威への対応である。

ウ：開発工程であり機会対応の分類ではない。

エ：IPAシラバスは機会への対応として活用、共有、強化、受容を挙げている。

総合解説：機会への対応は、有利な結果を確実にする活用、第三者と組む共有、確率・影響を高める強化、受容などから選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0085

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：標準

採用予定の技術に重大な法的制約があることが判明し、別技術へ切り替えればそのリスク源を完全に除去できる。最も適切な対応戦略はどれか。

- ア：転嫁である。
- イ：回避である。
- ウ：軽減である。
- エ：強化である。

答え・解説

正答：イ

ア：第三者へ責任・影響を移す対応ではない。

イ：リスク原因となる技術を使わないよう計画を変更し、脅威を取り除くため回避に当たる。

ウ：軽減は確率や影響を下げるが、ここでは原因自体を除去している。

エ：強化は機会への対応である。

総合解説：回避は、スコープ・方式・計画などを変えて脅威の原因や影響経路をなくす戦略である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0086

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：標準

性能不足の可能性があるため、早期に負荷試験を行い、ボトルネックを改善して発生確率を下げる。対応戦略として最も適切なものはどれか。

- ア：軽減である。
- イ：活用である。
- ウ：転嫁である。
- エ：回避である。

答え・解説

正答：ア

ア：性能不足の発生確率や影響を事前対策で下げるため軽減に当たる。

イ：活用は機会への対応である。

ウ：第三者へリスクを移していない。

エ：システム開発自体や性能要件をなくしているわけではない。

総合解説：軽減は、脅威の発生確率または発生時影響を受容可能な水準へ下げるための対策である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0087

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：標準

災害による機器損失に備えて保険へ加入する。リスク対応として最も適切な説明はどれか。

- ア：保険に加入すればプロジェクト側のリスク管理は一切不要になる。
- イ：金銭的影響の一部を第三者へ移す転嫁であるが、プロジェクトへの影響や管理責任が全て消えるわけではない。
- ウ：保険に加入すれば災害の発生確率がゼロになる回避である。
- エ：保険は機会を強化する戦略である。

答え・解説

正答：イ

ア：残存影響や事業継続などの管理は必要である。

イ：転嫁は脅威の財務的・契約的影響を第三者へ移す方法だが、発生確率そのものを必ず下げるわけではない。

ウ：保険は災害の発生原因を除去しない。

エ：主として脅威の影響移転に用いられる。

総合解説：転嫁では契約・保険等により影響の一部を第三者へ移せるが、残存リスクとプロジェクト責任を評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0088

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：応用

主要クラウド障害の脅威を受容するが、長時間停止時には代替環境へ切り替える計画を用意する。最も適切な計画はどれか。

- ア：代替環境は用意するが、発動条件を決めない。
- イ：計画を作ったので訓練・確認は不要とする。
- ウ：障害発生後にその場で誰が判断するか決める。
- エ：「停止が30分を超えたら代替環境へ切替える」など、発動条件・責任者・手順・必要資源を定める。

答え・解説

正答：エ

ア：いつ切り替えるか分からず対応がぶれる。

イ：実行可能性や有効性の確認が必要である。

ウ：緊急時の意思決定が遅れる。

エ：IPAシラバスはコンティンジェンシー計画とその発動条件を規定することを求めている。

総合解説：受容する脅威でも、重要なものには具体的なコンティンジェンシー計画と明確なトリガーを設ける。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0089

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：標準

外部企業の技術を組み合わせれば市場投入を早められる可能性があるが、自社だけでは実現できない。最も適切な機会対応はどれか。

ア：必ず単独開発し、実現可能性を下げる。

イ：機会の存在を隠して評価しない。

ウ：その企業との接点を断ち、機会を回避する。

エ：外部企業と協力関係を作り、機会を実現する能力を高める「共有」を検討する。

答え・解説

正答：エ

ア：外部連携による機会実現の可能性を評価すべきである。

イ：価値向上の可能性を失う。

ウ：機会を生かす目的に反する。

エ：機会の共有は、機会を実現する能力を持つ第三者と協力して便益を得る対応である。

総合解説：機会への対応では、自社だけで実現しにくい場合に第三者と能力・便益を共有する選択肢がある。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0090

3-3 リスク・不確かさ > リスク対応・機会と脅威 | 難易度：応用

影響額50万円の脅威に対し、1,000万円の対策を実施すれば発生確率をわずかに下げられる。最も適切な判断はどれか。

ア：対策の費用対効果、実行可能性、タイミング、残存リスクを評価し、受容やより低コストの対策も比較する。

イ：影響額が小さいので評価せず無条件に無視する。

ウ：リスクは全てゼロにすべきなので1,000万円を必ず使う。

エ：対策責任者を決めずに実施を開始する。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはリスク対応が適切で、費用対効果が高く、タイムリで現実的であることを求めている。

イ：発生確率や非金銭的影響も確認して判断すべきである。

ウ：対策コストが影響に見合わない可能性が高い。

エ：適正なメンバーへ対応を割り当てる必要がある。

総合解説：リスク対応は「強い対策ほど良い」ではなく、効果・コスト・時期・実現性・責任を総合して選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0091

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：基礎

プロジェクトにおける品質計画の説明として、最も適切なものはどれか。

ア：完成後の不具合件数だけを記録し、品質要求事項は事前に定めない。

イ：成果物だけでなく、活動やマネジメントプロセスにも適用する品質要求事項・規格・指標・実施方法を定める。

ウ：納期だけを定め、品質に関する尺度は設定しない。

エ：品質は開発担当者個人の判断に任せ、共通基準を設けない。

答え・解説

正答：イ

ア：品質計画は事後記録だけでなく、事前に要求事項・規格・管理方法を定める。

イ：IPAシラバスは、成果物、活動、マネジメントプロセスに適用する品質要求事項や規格を明確にし、品質保証・品質管理の方法と指標を計画するとしている。

ウ：品質はスケジュールとは別の管理対象であり、要求事項と尺度が必要である。

エ：共通の品質方針・規格・指標がなければ客観的な評価が難しくなる。

総合解説：品質計画では「何を品質とみなすか」「どう測るか」「誰がどの方法で保証・管理するか」を事前に明確にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0092

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：基礎

「オンライン申請画面は利用者が迷わず操作できること」という品質要求に対する指標として、最も適切なものはどれか。

ア：ソースコードの総行数だけを測る。

イ：プロジェクトメンバーの勤続年数だけを測る。

ウ：会議室の利用時間だけを測る。

エ：代表利用者によるタスク完了率や操作時間、満足度などを測定する。

答え・解説

正答：エ

ア：操作の分かりやすさとの直接的な対応が弱い。

イ：ユーザビリティ要求の達成状況を表さない。

ウ：成果物の品質要求とは無関係である。

エ：定量化しにくい要求でも、利用者視点の観測可能な尺度に置き換えることで達成状況を評価できる。

総合解説：品質指標は、品質要求事項との因果関係が説明でき、継続して観測・比較できるものを選ぶ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0093

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：基礎

品質計画で顧客満足度を扱う考え方として、最も適切なものはどれか。

ア：顧客満足度は売上高と常に同義である。

イ：顧客の期待や要求を把握し、必要に応じて満足度を測る尺度と確認方法を定める。

ウ：顧客満足度は主観的なので品質計画には一切含めない。

エ：顧客満足度は納品後に初めて考えればよい。

答え・解説

正答：イ

ア：売上は一つの経営指標であり、満足度そのものとは限らない。

イ：IPAシラバスは品質計画で顧客満足度を明確化し、その尺度を設定する能力を求めている。

ウ：定量化が難しくても確認方法を設計し、品質の一部として扱う。

エ：要求の不安定性がある場合など、開発途中から段階的に評価することが有効である。

総合解説：顧客満足度は、定量指標だけでは捉えにくい価値を含むため、レビュー・試用・アンケートなど適切な方法で確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0094

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：標準

新サービスでは利用者ニーズが変化しやすく、要求事項を一度で確定しにくい。品質計画として最も適切なものはどれか。

ア：優先度の高い要求から段階的にリリースし、顧客視点のステークホルダによる検証結果を次の計画へ反映する。

イ：顧客には完成まで一切見せず、最終日に初めて品質を確認する。

ウ：要求が不安定でも最初に全てを固定し、以後の検証結果は無視する。

エ：品質要求を設定せず、実装できた機能は全て受け入れる。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは要求事項が不安定な場合、優先要求に基づくシステムをリリースし、顧客満足度を段階的に評価する考え方を示している。

イ：早期フィードバックの機会を失い、手戻りが大きくなる。

ウ：変化を前提とした段階的な品質確認が必要である。

エ：品質評価の基準がなくなる。

総合解説：不確実性が高いときは、早い段階で顧客価値を検証し、学習した内容を品質要求や計画へ反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0095

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：標準

性能要求「ピーク時でも応答時間を短く保つ」を品質指標に落とし込む対応として最も適切なものはどれか。

ア：「できるだけ速くする」とだけ記載し、測定条件を定めない。

イ：測定方法を実行時に担当者が自由に換えられるようにする。

ウ：測定条件を明確にした応答時間の目標値・許容範囲を定め、測定方法も合わせて決める。

エ：応答時間ではなく、開発者数だけを品質指標にする。

答え・解説

正答：ウ

ア：達成判定が客観的にできない。

イ：比較可能性が失われる。

ウ：管理指標は測定条件、目標値、許容範囲が明確であるほど評価と是正判断に使いやすい。

エ：成果物の性能要求と直接結び付かない。

総合解説：品質指標は、再現可能な条件で測定でき、目標・許容範囲を超えたときには是正判断へつなげられる形にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0096

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：標準

レビュー工数を100万円増やすと、本番障害の期待損失を500万円程度減らせると見込める。品質計画として最も適切な判断はどれか。

ア：品質向上施策は費用が増えるので必ず実施しない。

イ：予防・評価に投入するコストと、欠陥による損失低減効果を比較し、全体として合理的か評価する。

ウ：レビューを増やす代わりに品質要求を削除する。

エ：品質施策は効果を測らず、予算がある限り無制限に追加する。

答え・解説

正答：イ

ア：品質不良による損失との比較が必要である。

イ：IPAシラバスは品質確保への投入コストと品質改善効果のトレードオフを評価する能力を求めている。

ウ：要求変更は別の意思決定であり、品質施策の代替ではない。

エ：費用対効果を評価する必要がある。

総合解説：品質コストは「多ければよい」ものではなく、予防・評価コストと失敗コストを含めて全体最適を考える。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0097

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：標準

レビュー対象の設計書が頻繁に差し替わり、どの版をレビューしたか分からなくなる問題が起きている。品質計画上の改善として最も適切なものはどれか。

ア：レビュー結果を記録せず、口頭だけで共有する。

イ：レビュー対象版を識別・固定し、変更履歴と承認状態を追跡できる構成管理手順を品質計画と連携させる。

ウ：差し替えを自由に行い、レビュー中の変更も許可する。

エ：版管理を廃止し、常に最新ファイル名だけを使う。

答え・解説

正答：イ

ア：証跡と追跡可能性が失われる。

イ：IPAシラバスは品質保証と関連の深い構成管理も品質計画で扱うとしている。

ウ：レビュー基準点が変動し、結果の信頼性が下がる。

エ：どの版を評価したか追跡できなくなる。

総合解説：品質評価の対象が特定できなければ結果も信頼できないため、構成管理とレビュー・テストを結び付ける。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0098

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：応用

高い可用性を実現するため冗長化を増やす案があるが、コストと運用複雑性が大きく上昇する。プロジェクトマネージャの対応として最も適切なものはどれか。

ア：品質上の競合は技術者だけで決め、顧客には説明しない。

イ：可用性だけを最大化し、コストや運用性は考慮しない。

ウ：可用性要求の重要度、コスト、運用リスク、顧客価値を比較し、ステークホルダと許容水準を合意して品質計画へ反映する。

エ：コストを下げるため可用性要求を無断で削除する。

答え・解説

正答：ウ

ア：価値と制約に関わるため適切なステークホルダとの合意が必要である。

イ：一つの品質特性の部分最適になる。

ウ：品質要求は他の制約と独立ではなく、プロジェクト目標全体の中でトレードオフを調整する必要がある。

エ：要求変更には関係者の合意が必要である。

総合解説：品質計画では、品質特性同士やコスト・期間との競合を明示し、価値に基づいて合意形成する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0099

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：応用

「レビュー指摘件数が少ないほど品質が高い」という単一指標だけを目標にしたところ、軽微な指摘を記録しない行動が増えた。改善として最も適切なものはどれか。

ア：指摘件数だけでなく、欠陥流出率、重大度、再発率、レビュー実施状況など複数の尺度を組み合わせ、指標の副作用を監視する。

イ：指標を全廃し、品質を感覚だけで判断する。

ウ：指摘を記録した担当者を評価上不利にする。

エ：指摘件数ゼロをさらに厳格なノルマにする。

答え・解説

正答：ア

ア：単一指標を目的化すると本来の品質改善から外れるため、要求に対応する複数の観点と透明性が必要である。

イ：客観的評価が難しくなる。

ウ：欠陥の隠蔽を促し、品質情報の信頼性を損なう。

エ：記録抑制を強める可能性がある。

総合解説：品質指標は行動を誘導するため、測定対象と本来の価値がずれないように、複数指標と定性的判断を組み合わせる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0100

3-4 品質マネジメント > 品質計画・品質指標 | 難易度：標準

顧客との合意により、性能要求が大幅に厳しくなった。最も適切な対応はどれか。

ア：変更の影響を評価して承認を得た上で、品質指標・テスト条件・必要資源・スケジュールなど関連する品質計画を更新する。

イ：変更後も旧基準で合否判定する。

ウ：担当者判断で要求値を元に戻す。

エ：性能要求だけ変更し、テスト条件や資源計画は以前のままにする。

答え・解説

正答：ア

ア：品質要求の変更は関連する管理計画へ波及するため、統制された変更として反映する必要がある。

イ：品質評価基準が要求と不整合になる。

ウ：承認済み変更を無断で取り消すのは不適切である。

エ：新要求を検証できない可能性がある。

総合解説：品質計画は要求変更と連動して更新し、指標・保証方法・管理方法・資源の整合性を維持する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0101

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：基礎

品質保証の役割として、最も適切なものはどれか。

ア：定めた品質方針・手順・プロセスが適切に実施され、要求品質を達成できる状態かを継続的に確認する。

イ：完成品の欠陥を一件ずつ修正する作業だけを指す。

ウ：品質基準を無視して納期だけを優先する活動である。

エ：顧客からのクレームが起きた後だけ実施する活動である。

答え・解説

正答：ア

ア：品質保証は、品質を作り込むプロセスや手順の適切性と遂行状況を確認し、品質目標の達成を支援する。

イ：欠陥修正は品質管理・是正の側面であり、品質保証はプロセスの適切性も対象とする。

ウ：品質保証は品質要求への適合を支援する。

エ：ライフサイクルを通して予防的・継続的に行う。

総合解説：品質保証は、個々の欠陥検出だけでなく、欠陥を生みにくいプロセスが計画どおり機能しているかを確かめる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0102

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：基礎

設計レビューを実施する主な目的として、最も適切なものはどれか。

ア：テストを全て不要にする。

イ：成果物の承認者を責める証拠を作る。

ウ：設計内容を読まずに会議回数だけ増やす。

エ：成果物を早期に検証し、要求との不一致や欠陥を後工程へ流出する前に発見・是正する。

答え・解説

正答：エ

ア：レビューとテストは異なる欠陥検出手段であり、相互補完する。

イ：レビューの目的は責任追及ではなく品質向上である。

ウ：形式だけでは品質保証にならない。

エ：レビューは成果物の品質を早い段階で確認し、手戻りコストを抑える有効な品質保証・管理活動である。

総合解説：レビューは、適切な参加者・観点・対象版を定め、欠陥や不整合を早期に発見して後工程への流出を防ぐ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0103

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：基礎

業務要件レビューの参加者として、最も適切な考え方はどれか。

ア：作成者一人だけで全てのレビューを完了する。

イ：参加者は多いほどよいので全社員を必ず招集する。

ウ：要求を理解する業務担当者や顧客視点のステークホルダ、設計・実装に関わる必要な専門家を目的に応じて選ぶ。

エ：成果物に関係しない人だけを無作為に選ぶ。

答え・解説

正答：ウ

ア：独立した視点や利用者視点を得にくい。

イ：目的に必要な知識と役割に絞らなければ効率を損なう。

ウ：IPAシラバスはレビューの種類、責任、参加者を計画し、顧客視点で要求を検証できるステークホルダを特定することを求めている。

エ：必要な知識や権限を持つ参加者が必要である。

総合解説：レビュー参加者は「誰が最も欠陥・要求不一致を見つけられるか」「誰が合意に必要なか」で選定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0104

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：標準

要件定義書には50件の要求があるが、基本設計書のどこに反映されたか追跡できない。レビューで最も適切な確認はどれか。

ア：設計書のページ数だけを確認する。

イ：要求番号を全て削除して追跡を不要にする。

ウ：要求と設計要素の対応関係を追跡し、未反映・重複・不要な設計がないか確認する。

エ：未反映の要求は自動的に不要とみなす。

答え・解説

正答：ウ

ア：要求反映の有無は判断できない。

イ：トレーサビリティを失う。

ウ：要求から成果物へのトレーサビリティは、漏れや過剰実装を検出する有効なレビュー観点である。

エ：要求変更には合意が必要である。

総合解説：レビューでは、要求・設計・実装・テストのつながりを確認すると、品質要求の漏れと不要機能を検出しやすい。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0105

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：標準

複数の設計レビューで同じ種類のインタフェース定義漏れが繰り返し発生している。最も適切な対応はどれか。

ア：同じ指摘は記録しないことにする。

イ：レビューを廃止して指摘件数をゼロにする。

ウ：個別修正に加えて根本原因を分析し、設計標準やチェックリスト、教育などプロセス側の改善を行う。

エ：毎回その場で修正するだけで、原因は調べない。

答え・解説

正答：ウ

ア：品質情報を隠すだけで改善にならない。

イ：欠陥検出の機会を失う。

ウ：同種欠陥の反復はプロセス上の原因を示す可能性があり、品質保証では再発防止につなげる。

エ：再発が続く。

総合解説：品質保証では、レビュー結果をプロセスの学習データとして用い、再発する欠陥の原因を除去する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0106

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：標準

安全性に関わる重要機能のレビューを、作成者だけで済ませようとしている。最も適切な対応はどれか。

ア：作成者が最も詳しいので、他者のレビューは必ず不要である。

イ：リスクと重要度に応じて、作成者以外の専門家や独立した品質担当を参加させ、多面的に検証する。

ウ：レビュー結果は記録せず、参加者の記憶に任せる。

エ：重要機能ほどレビューを省略して開発を速める。

答え・解説

正答：イ

ア：自己レビューだけでは見落としが残る可能性がある。

イ：重要な成果物ほど、独立した視点を加えることで思い込みや見落としを減らせる。

ウ：追跡・是正確認ができない。

エ：重大な品質リスクを高める。

総合解説：レビューの独立性は一律ではなく、成果物の重要性・リスク・規格要求に応じて必要な水準を決める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0107

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：標準

画面操作の分かりやすさに関する要求を文章だけで確定しにくい。品質保証の方法として最も適切なものはどれか。

ア：プロトタイプを利用者に操作してもらい、観察やフィードバックで要求の妥当性と満足度を検証する。

イ：最終納品まで確認を延期する。

ウ：利用者に見せず、開発者だけで使いやすさを決める。

エ：文章を長くすれば利用者検証は不要とする。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは、プロトタイピングなど顧客満足度を確認する品質保証の技法を選択する能力を求めている。

イ：手戻りが大きくなる可能性がある。

ウ：顧客視点を十分に検証できない。

エ：実際の操作で初めて分かる問題がある。

総合解説：定量化しにくい品質特性は、利用者参加型の試行やプロトタイプで早期に検証することが有効である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0108

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：標準

レビューが毎回直前に設定され、必要な専門家を確保できず遅延が生じている。改善として最も適切なものはどれか。

ア：レビュー日は成果物完成後に毎回その場で決める。

イ：レビューの所要時間をゼロとして日程計画する。

ウ：レビューの種類・時期・責任者・参加者・必要準備を品質計画に定め、スケジュールと資源計画へ組み込む。

エ：専門家が参加できなくてもレビュー完了扱いにする。

答え・解説

正答：ウ

ア：資源確保が不安定になりやすい。

イ：実際の作業量を無視している。

ウ：IPAシラバスはレビューの種類、責任、参加者を含めて品質計画にまとめている。

エ：目的を満たさない形式的なレビューになる。

総合解説：品質活動もプロジェクト作業の一部であり、レビュー資源・準備・是正時間まで計画に組み込む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0109

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：応用

レビュー実施率は100%だが、本番へ流出する重大欠陥が増えている。最も適切な対応はどれか。

ア：重大欠陥を集計対象から除外して指標を改善する。

イ：実施率100%なので品質保証に問題はないと判断する。

ウ：実施率だけでなく欠陥検出率・流出率・原因・レビュー観点を分析し、品質保証プロセス自体の有効性を見直す。

エ：レビュー回数を減らして流出率の変化を見ない。

答え・解説

正答：ウ

ア：実態を隠すだけである。

イ：結果指標が悪化しており、有効性を再評価すべきである。

ウ：活動を実施した事実だけでは品質保証の有効性を示せず、結果と価値に結び付く尺度で継続改善する必要がある。

エ：原因分析なしの削減は不適切である。

総合解説：品質保証は「やったか」だけでなく「欠陥予防・早期検出に有効だったか」を測り、プロセスを改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0110

3-4 品質マネジメント > 品質保証・レビュー | 難易度：応用

承認済み基本設計に重大な誤りがレビュー後に見つかり、仕様変更が必要になった。最も適切な対応はどれか。

ア：設計書だけを担当者が秘密裏に修正し、他文書は変更しない。

イ：実装側だけで吸収し、設計書は誤ったままにする。

ウ：重大な誤りでも承認済みなので修正しない。

エ：影響範囲を分析して変更要求を正式に扱い、承認後に関連成果物・計画・構成情報を更新し、再レビューする。

答え・解説

正答：エ

ア：整合性と追跡可能性が失われる。

イ：成果物間の不整合が残る。

ウ：品質要求未達を放置することになる。

エ：品質是正がスコープや仕様へ影響する場合は変更管理と構成管理を連携させる必要がある。

総合解説：レビューで発見した欠陥が承認済みベースラインへ影響する場合、是正を変更管理に接続して一貫性を保つ。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0111

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：基礎

品質管理の遂行として、最も適切なものはどれか。

ア：プロジェクト終了時にだけ一度実施する。

イ：欠陥を見つけても記録せず、納期を優先する。

ウ：成果物やプロセスの実績を品質要求・規格・指標と比較し、未達の原因と是正方法を特定する。

エ：品質要求と比較せず、担当者の感覚だけで合否を決める。

答え・解説

正答：ウ

ア：品質管理はライフサイクル全体を通して行う。

イ：原因分析と是正につながらない。

ウ：IPAシラバスは品質管理で、品質要求事項・規格への適合状況を明らかにし、未達時の原因と是正方法を特定するとしている。

エ：客観的な品質管理にならない。

総合解説：品質管理は、測定・比較・原因分析・是正という循環で品質要求への適合を維持する活動である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0112

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：基礎

欠陥管理で優先順位を決める考え方として、最も適切なものはどれか。

ア：表示上の軽微な誤字を、データ損失欠陥より必ず優先する。

イ：欠陥の重大度、発生条件、利用者への影響、回避策、リリース時期などを総合して修正優先度を決める。

ウ：発見順だけで必ず修正する。

エ：全欠陥を同じ重要度として扱う。

答え・解説

正答：イ

ア：一般に影響の大きい欠陥を優先すべきである。

イ：欠陥の優先順位は単なる件数ではなく、プロジェクト目標や利用者への影響で決める。

ウ：重大な欠陥が後から見つかった場合に優先できない。

エ：影響度は欠陥ごとに異なる。

総合解説：欠陥の優先度は、品質要求とリスクに基づき、限られた資源を重大な影響の低減へ配分できるように設定する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0113

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：基礎

欠陥を継続管理するための記録として、最も適切なものはどれか。

ア：発見内容、再現条件、重大度、担当、状態、原因、修正内容、再確認結果などを追跡できるようにする。

イ：修正済みになった欠陥は即座に履歴ごと削除する。

ウ：欠陥件数だけを記録し、個別内容は残さない。

エ：担当者名だけを記録し、欠陥内容は書かない。

答え・解説

正答：ア

ア：欠陥を識別して原因分析・是正・再確認まで追跡するには、状態と根拠の記録が必要である。

イ：再発分析や監査の証跡が失われる。

ウ：原因分析や再現確認ができない。

エ：技術的な追跡に使えない。

総合解説：欠陥台帳は、発見から終結までの状態遷移と根拠を追跡し、品質傾向分析にも利用できる形にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0114

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：標準

結合テストで同じ種類のデータ型不一致が多数発生した。最も適切な対応はどれか。

ア：個別修正に加え、インターフェース定義・レビュー手順・自動検証の不足など根本原因を分析し、再発防止策を実施する。

イ：欠陥件数が多いので記録を停止する。

ウ：発見された箇所だけを修正し、同種欠陥の発生原因は調べない。

エ：テストケースを減らして欠陥件数を少なく見せる。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは欠陥の原因分析、原因の除去、予防処置を品質管理の技能としている。

イ：品質情報を失う。

ウ：再発しやすい。

エ：品質は改善しない。

総合解説：大量・反復する欠陥は、個別修正だけでなく共通原因を取り除くことで品質プロセス全体を改善する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0115

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：標準

単体テストで見つけるべき単純なロジック欠陥が、結合テストで多く発見されている。最も適切な分析はどれか。

ア：結合テストで見つかったので単体テストには問題がないと判断する。

イ：全ての単体テストを廃止して結合テストへ統合する。

ウ：結合テストでの欠陥記録を削除する。

エ：単体テストの観点・カバレッジ・レビュー・完了基準が十分か確認し、前工程での検出力を改善する。

答え・解説

正答：エ

ア：本来早期に検出できる欠陥の流出を評価すべきである。

イ：早期検出の機会を失う。

ウ：流出の事実が隠れる。

エ：後工程への欠陥流出は、上流・前工程の品質活動が十分でない兆候となる。

総合解説：欠陥流出率を工程別に見ると、どこで品質を作り込むべきかを特定しやすい。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0116

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：標準

週ごとの重大欠陥発生件数が、これまで1～2件だったのに直近3週で7件、9件、11件と増加した。最も適切な対応はどれか。

ア：欠陥の重大度を全て軽微に変更して件数を減らす。

イ：数値を以前の水準に書き換える。

ウ：偶然と決めつけず、変更内容・担当構成・工程・ツールなどの変化と関連付けて原因を分析し、必要な是正を行う。

エ：件数が増えても平均値だけ見て何もしない。

答え・解説

正答：ウ

ア：実態を隠すだけである。

イ：実績改ざんである。

ウ：品質管理測定値の傾向変化はプロセス異常の兆候として扱い、原因分析につなげるべきである。

エ：明確な悪化傾向を見落とす。

総合解説：品質指標は単一時点だけでなく傾向として監視し、異常な変化を早期に検出する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0117

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：標準

テストで性能要求未達が判明し、アーキテクチャ変更が必要になった。最も適切な対応はどれか。

ア：要求未達でも設計変更は大きいので放置する。

イ：性能要求の方を無断で緩和する。

ウ：担当者だけでアーキテクチャを変更し、影響は記録しない。

エ：原因を特定し、是正案が承認済み設計やベースラインへ影響するなら変更要求として影響評価・承認を行う。

答え・解説

正答：エ

ア：品質要求を満たせない。

イ：要求変更には承認が必要である。

ウ：スコープ・コスト・日程への影響を統制できない。

エ：IPAシラバスは品質未達に対し是正処置又は変更要求を行い、必要に応じて計画変更を承認して反映することを求めている。

総合解説：品質是正が基準計画や成果物構成へ影響するときは、品質管理と変更管理を接続する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0118

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：標準

後工程での欠陥修正コストが急増している。改善策として最も適切なものはどれか。

ア：上流レビュー、自動静的解析、テスト設計など予防・早期検出へ適切に投資し、後工程の除去コストとのバランスを最適化する。

イ：欠陥修正費が高いので欠陥を記録しない。

ウ：全ての予防施策を無条件に最大化する。

エ：予防活動を全て削減して修正作業だけ増やす。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは予防コストと欠陥除去コストをバランスさせる能力を求めている。

イ：実態が改善しない。

ウ：費用対効果を考慮する必要がある。

エ：後工程の高い除去コストがさらに増える可能性がある。

総合解説：品質コストは、欠陥を未然に防ぐ投資と発見後の修正コストを総合して最小化する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0119

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：応用

リリース候補版は総欠陥件数が減っている一方、未解決の重大障害が1件残り、性能も合格基準ぎりぎりである。最も適切な判断はどれか。

ア：重大欠陥が1件でもあれば影響に関係なく必ずプロジェクト中止する。

イ：性能結果を記録から外して合格とする。

ウ：総欠陥件数が減ったので必ずリリースする。

エ：件数だけでなく重大度、残存リスク、性能、回避策、顧客影響を品質基準と照合し、必要ならリリース延期や条件付き判断を関係者で行う。

答え・解説

正答：エ

ア：影響・回避策・許容度を評価して判断する。

イ：品質情報の改ざんである。

ウ：重大度と要求達成状況を無視している。

エ：総件数が少なくても重大欠陥や重要品質要求の未達があれば、リリース判断に大きく影響する。

総合解説：リリース判断は単一指標でなく、品質要求・残存リスク・顧客価値を統合して行う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0120

3-4 品質マネジメント > 品質管理・欠陥管理 | 難易度：応用

3回の反復で欠陥流出率は改善したが、顧客満足度が低下している。最も適切な対応はどれか。

ア：欠陥指標だけで改善と結論付けず、顧客満足度や価値指標も分析し、品質プロセスと要求理解の両面を継続改善する。

イ：反復回数を増やせば自動的に満足度も上がると仮定する。

ウ：顧客満足度を品質指標から削除する。

エ：欠陥流出率が改善したので顧客満足度は無視する。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスは品質プロセスのパフォーマンスを顧客満足度など価値を表す尺度で定期的に測定し改善することを求めている。

イ：原因分析と検証が必要である。

ウ：問題を隠すだけである。

エ：品質の目的である顧客価値を見失う。

総合解説：品質改善は内部欠陥の減少だけでなく、顧客が期待する価値を実現しているかまで確認する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0121

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：基礎

調達計画の説明として、最も適切なものはどれか。

ア：価格だけを決め、品質・納期・契約条件は考えない。

イ：何を内製し何を外部調達するか、調達対象・要求事項・契約形態・選定方法・管理方法などを事前に定める。

ウ：供給者決定後に初めて調達対象を考える。

エ：全作業を必ず外注することを意味する。

答え・解説

正答：イ

ア：調達は複数の要求と制約を扱う。

イ：IPAシラバスは調達開始前に戦略とプロセス全体を策定し、調達のマネジメント方法と仕様書・要求事項を作成するとしている。

ウ：調達対象と方針は選定前に計画する。

エ：内製と調達の最適な組合せを判断する。

総合解説：調達計画は、外部資源を使う意思決定をプロジェクト目標と整合させ、透明な選定・契約・管理へつなげる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0122

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：基礎

RFP（提案依頼書）の主な目的として、最も適切なものはどれか。

ア：契約締結後に供給者へ秘密の要件を追加するために使う。

イ：発注側の目的・要求・条件を候補供給者へ共通に示し、比較可能な提案を求める。

ウ：候補供給者ごとに異なる要求を伝え、比較できなくする。

エ：価格を決めるだけで、成果物や体制は記載しない。

答え・解説

正答：イ

ア：RFPは選定前に要求と条件を示すための文書である。

イ：IPAシラバスはRFPに関する知識を調達計画の要素として挙げており、モデル契約資料でも提案依頼の明確化を重視している。

ウ：公平で合理的な比較を妨げる。

エ：提案評価には品質・体制・スケジュールなど複数の条件が必要である。

総合解説：RFPは、発注者と候補供給者の認識差を減らし、同じ前提に基づく提案比較を可能にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0123

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：基礎

内製と外部調達の切り分けとして、最も適切な考え方はどれか。

ア：組織のコア領域、内部の処理能力・力量、納期、コスト、リスクなどを評価して決める。

イ：担当者の個人的な好みだけで決める。

ウ：外部の方が必ず安いと仮定し、全て外注する。

エ：内製の方が必ず安全と仮定し、外部資源を一切使わない。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAシラバスはプロジェクト特徴と組織内の処理能力・力量を考慮して内製部分と調達部分を識別する能力を求めている。

イ：組織戦略とプロジェクト条件に基づくべきである。

ウ：コスト以外の能力・知識保持・リスクも考慮する必要がある。

エ：内部の能力や納期制約によっては合理的でない。

総合解説：調達判断は、コア能力をどこに保持するかを含む戦略的意思決定であり、単純な価格比較ではない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0124

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：標準

複数社から提案を受ける予定だが、価格・技術・体制のどれを重視するか社内でも合意していない。RFP発行前の対応として最も適切なものはどれか。

ア：提案受領後に、一番気に入った会社に合わせて評価基準を作る。

イ：評価基準を決めず、会議の雰囲気を選ぶ。

ウ：価格だけを自動的に唯一の基準とする。

エ：要求と選定方針を整理し、評価項目・重み・必須条件などを合意して提案比較の基準を定める。

答え・解説

正答：エ

ア：恣意的な評価になり、比較の公正性を損なう。

イ：再現性・説明可能性がない。

ウ：品質・実現性・体制など重要な条件を見落とす。

エ：供給者選定を合理的に行うには、RFP発行前に組織の選定基準と評価方法を明確にする必要がある。

総合解説：評価基準は提案を見る前に定め、要求事項とプロジェクト目標に結び付けることで透明な選定ができる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0125

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：標準

調達仕様書に機能要件はあるが、性能測定条件や受入判定条件がない。最も適切な改善はどれか。

ア：性能要求を削除して受入を簡単にする。

イ：受入条件は納品後に発注者が自由に決める。

ウ：測定条件・合格基準・成果物・検収方法を明確にし、供給者と共通理解できる要求として示す。

エ：検収を行わず、納品されたら自動的に受入とする。

答え・解説

正答：ウ

ア：必要品質を満たせなくなる。

イ：供給者が何を満たせばよいか予見できず、紛争を招きやすい。

ウ：調達仕様書は後の履行確認・検収の基準になるため、受入条件を事前に明確化することが重要である。

エ：要求適合の確認ができない。

総合解説：調達要求は契約・検収まで一貫して使える具体性を持たせ、曖昧な合否基準を残さない。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0126

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：標準

運用サービスを外部調達する。SLAの計画として最も適切なものはどれか。

ア：サービス名だけを記載し、品質条件は供給者に任せる。

イ：SLAは契約とは無関係なので、締結後に口頭で決める。

ウ：可用性100%だけを書き、除外条件や測定方法を定めない。

エ：可用性、応答時間、障害対応時間、測定方法、報告方法などサービス品質の要求を明確化する。

答え・解説

正答：エ

ア：期待サービス水準を客観的に管理できない。

イ：サービス要求と契約管理へ結び付ける必要がある。

ウ：達成判定が曖昧になる。

エ：IPAシラバスは調達計画・運営管理でSLAに関する知識を求めている。

総合解説：SLAは数値だけでなく、測定条件・責任・報告・是正の仕組みを合わせて定義する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0127

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：標準

要求がかなり確定しており、完成すべき成果物と受入基準を明確に定義できる開発部分がある。調達計画での検討として最も適切なものはどれか。

ア：必ず派遣契約にする。

イ：成果物完成責任との整合を確認し、請負を含む契約形態を候補として法務・調達部門と検討する。

ウ：契約書を作らず口頭合意だけで進める。

エ：要求が明確でも契約形態は一切検討しない。

答え・解説

正答：イ

ア：成果物完成責任との適合を検討せず一律選択するのは不適切である。

イ：IPAシラバスは請負、準委任、派遣など契約形態の基本知識と最適な組合せを構成する能力を求めている。

ウ：責任・成果物・条件が不明確になる。

エ：作業特性に応じて契約形態を選ぶ必要がある。

総合解説：契約形態は名称だけで選ばず、成果物の確度度、責任分担、指揮命令関係、法令遵守を踏まえて判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0128

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：応用

基盤をA社、アプリをB社へ分割発注する予定で、双方の成果物が密接に依存する。最も適切な調達計画はどれか。

ア：責任分界、インタフェース、統合試験、変更通知、問題解決、全体統括の役割を明確にし、ベンダ間依存を管理する。

イ：発注者は調整に関与せず、A社とB社の自主交渉だけに任せる。

ウ：同じ仕様書を渡せば責任分界は不要である。

エ：各社は独立しているので相互の連携方法を定めない。

答え・解説

正答：ア

ア：分割発注では責任の隙間や相互依存がリスクになるため、調達計画で統合責任と連携方法を明確にする必要がある。

イ：全体成果に対する統括管理が不足する。

ウ：境界条件と統合責任は別途明確化が必要である。

エ：統合時に責任の隙間や手戻りが発生しやすい。

総合解説：マルチベンダ調達では、個別契約の最適化だけでなく、プロジェクト全体の統合と責任分界を計画する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0129

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：応用

唯一の供給者に依存する特殊製品を使う計画で、代替品への切替には3か月かかる。調達計画として最も適切な対応はどれか。

ア：供給停止の確率・影響を評価し、在庫、代替設計、納期余裕、契約条件など複数の対応策を計画する。

イ：問題が起きてから初めて代替品を探す。

ウ：製品価格だけを比較し、供給継続性は考えない。

エ：唯一の供給者なのでリスク評価は不要とする。

答え・解説

正答：ア

ア：調達の前提・制約を識別し、供給者依存がプロジェクトへ与えるリスクを事前に管理する必要がある。

イ：切替リードタイムがあるため事前計画が必要である。

ウ：調達の適時性・安定性も重要な要求である。

エ：代替性が低いほど影響が大きくなり得る。

総合解説：調達計画では、価格だけでなく供給継続性・代替性・リードタイムなどサプライ側の不確実性も扱う。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0130

3-5 調達マネジメント > 調達計画・RFP | 難易度：標準

RFP案に「使いやすいシステム」「十分な性能」とだけ書かれている。最も適切な改善はどれか。

ア：曖昧な方が供給者の自由度が高いので、そのまま発行する。

イ：要求を全て削除し、供給者に目的も伝えない。

ウ：候補会社ごとに後から異なる意味を説明する。

エ：利用場面や業務条件を整理し、評価可能な品質要求・測定条件・必須条件へ具体化する。

答え・解説

正答：エ

ア：比較や検収の基準が不明確になる。

イ：適切な提案を得られない。

ウ：公正な比較ができない。

エ：曖昧な要求は提案内容のばらつきと契約後の認識不一致を生むため、比較・受入可能な形にする必要がある。

総合解説：RFPは必要な創意工夫の余地を残しつつ、目的・制約・評価基準・必須要求は共通理解できる明確さが必要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0131

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：基礎

供給者選定の考え方として、最も適切なものはどれか。

ア：評価基準は選定後に作る。

イ：過去に付き合いがある会社を必ず選び、提案内容は評価しない。

ウ：最安値の会社を無条件で選ぶ。

エ：価格だけでなく、技術力、実績、体制、品質、納期、リスク、継続性など事前に定めた基準で評価する。

答え・解説

正答：エ

ア：恣意的な選定になる。

イ：プロジェクト要求への適合性を評価する必要がある。

ウ：実現性や品質、リスクを無視している。

エ：IPAシラバスは組織の供給者選定基準に関する知識を求めている。

総合解説：供給者選定は、プロジェクトの成功条件に対応した評価基準を事前に定め、証拠に基づいて比較する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0132

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：基礎

複数社の提案を評価するときの運用として、最も適切なものはどれか。

ア：候補会社の提案書を読まず、会社規模だけで決める。

イ：評価項目ごとの得点・根拠・懸念点を記録し、選定理由を後から説明できるようにする。

ウ：評価者ごとに全く異なる基準を使う。

エ：最終順位だけを決め、理由は残さない。

答え・解説

正答：イ

ア：要求への適合性を評価していない。

イ：合理的な供給者選定には、比較可能な基準と判断根拠の記録が重要である。

ウ：比較の一貫性が失われる。

エ：判断の透明性と説明可能性が低下する。

総合解説：提案評価は、基準・証拠・判断理由を記録し、承認者や関係者に説明できるプロセスにする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0133

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：基礎

システム開発契約で明確にしておく事項として、最も適切なものはどれか。

ア：契約金額だけを定め、成果物や役割は記載しない。

イ：受入条件を供給者だけが後から決める。

ウ：成果物、役割・責任、前提、納期、品質・受入条件、変更手続、知的財産・機密保持など必要な契約条件である。

エ：変更手続を定めず、発注者がいつでも無制限に追加要求できるようにする。

答え・解説

正答：ウ

ア：履行内容を判断できない。

イ：発注者との共通基準にならない。

ウ：IPAのモデル取引・契約書は、ユーザとベンダの役割分担や各開発段階の責務を明確にすることを重視している。

エ：スコープ・費用・納期の紛争を招きやすい。

総合解説：契約は責任の境界と意思決定手順を明らかにし、プロジェクト中の変更や受入を予測可能にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0134

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：標準

A社は最安だが主要技術の実績が乏しく、B社は10%高いが実績・体制・品質保証が優れている。最も適切な選定はどれか。

ア：事前に定めた重みで価格と技術・体制・リスクを評価し、総合的に最も価値の高い提案を選ぶ。

イ：評価基準を使わず、担当者の直感で選ぶ。

ウ：必ずA社を選ぶ。価格が唯一の評価要素だからである。

エ：必ずB社を選ぶ。高い会社ほど品質が高いからである。

答え・解説

正答：ア

ア：最安値だけでなく、プロジェクト目標の達成可能性を含む総合評価が必要である。

イ：再現性と説明可能性がない。

ウ：技術・品質・リスクを無視している。

エ：価格の高さだけで品質を保証できない。

総合解説：供給者選定は、価格・品質・実現性・リスクをプロジェクト価値へ換算して比較する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0135

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：標準

候補供給者が「通常6か月の開発を2か月で完成できる」と提案したが、追加資源や方法の説明がない。最も適切な対応はどれか。

ア：根拠確認は失礼なので質問しない。

イ：納期の数字だけを半分に修正して契約する。

ウ：前提、体制、工数、工程、品質保証、実績などの根拠を確認し、実現可能性とリスクを評価する。

エ：最短納期なので無条件で選定する。

答え・解説

正答：ウ

ア：重要な不確実性を放置する。

イ：合理的な見積り根拠にならない。

ウ：提案内容は数字だけでなく、その実現根拠と前提を検証して選定する必要がある。

エ：実現性を確認していない。

総合解説：魅力的な提案ほど、前提・資源・品質への影響を確認し、楽観的な約束をリスクとして評価する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0136

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：標準

外部人材を調達する際の契約形態を検討する考え方として、最も適切なものはどれか。

ア：契約名さえ請負と書けば、実態がどのようなでも問題ない。

イ：成果物責任、業務遂行方法、指揮命令関係など実態に合う契約形態を、法務・調達ルールと照合して選ぶ。

ウ：契約形態はプロジェクトマネジメントと無関係なので確認しない。

エ：どの契約形態でも役割・責任は同じである。

答え・解説

正答：イ

ア：契約名称と実態の不一致は法令・管理上の問題となり得る。

イ：IPAシラバスは請負・準委任・派遣の基本知識と法令遵守を求めている。

ウ：役割・責任・管理方法に直接影響する。

エ：契約形態により責任や指揮命令の扱いが異なる。

総合解説：契約形態は実際の業務遂行と整合させ、法令・責任分担・管理方法まで含めて判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0137

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：標準

見積りは「発注者が毎週2名の業務専門家を提供する」ことを前提としているが、発注者側で確保できるか未確認である。最も適切な対応はどれか。

ア：契約前に前提の実現可能性を確認し、発注者の協力事項・未達時の影響や対応を明確にする。

イ：確保できない場合でも供給者だけが責任を負うとする。

ウ：契約後に初めて前提を伝える。

エ：前提は供給者の内部事情なので発注者に伝えない。

答え・解説

正答：ア

ア：IPAモデル契約は、ユーザ側にも仕様決定や資料提供など必要な協力があることを明確化している。

イ：責任分担と前提条件が不整合になる。

ウ：認識差と紛争リスクが高まる。

エ：前提が崩れると納期・費用へ影響するため共有が必要である。

総合解説：契約は供給者の義務だけでなく、発注者の協力事項や依存条件も具体化することで実行可能性を高める。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0138

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：標準

長期開発で要求変更が予想される。契約上の対応として最も適切なものはどれか。

ア：変更要求の起票、影響見積り、承認、費用・納期調整、契約変更の手順を事前に定める。

イ：変更は口頭で依頼し、記録を残さない。

ウ：変更は全て元契約金額で無制限に実施させる。

エ：要求変更は一切認めないとだけ定める。

答え・解説

正答：ア

ア：変更が予想される場合でも、変更を統制する手順を明確にしておくことでスコープ膨張や紛争を抑えられる。

イ：影響と合意内容を追跡できない。

ウ：供給者の負担と納期リスクを無制限に増やす。

エ：現実に変化が発生したときの処理方法がない。

総合解説：変更手続を契約に組み込むと、追加要求を透明に評価し、合意した条件で実施できる。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0139

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：応用

最有力候補は技術力が高いが、その会社へ既に複数の重要システムを集中委託している。最も適切な選定判断はどれか。

ア：集中を避けるため能力の低い会社を無条件で選ぶ。

イ：既存委託状況を一切確認しない。

ウ：技術力が高いので集中リスクは存在しないとみなす。

エ：技術・価格だけでなく、集中による供給停止・交渉力・代替性・知識偏在リスクも評価して意思決定する。

答え・解説

正答：エ

ア：リスク低減と実現性を総合評価する必要がある。

イ：組織レベルの依存を見落とす。

ウ：優秀な供給者でも事業継続・依存リスクは残る。

エ：供給者選定では単一案件の適合性だけでなく、組織全体の依存と継続性もリスクとなり得る。

総合解説：供給者選定は案件単体の採点だけでなく、ポートフォリオ上の集中・代替性も含めて全体最適で判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0140

3-5 調達マネジメント > 供給者選定・契約 | 難易度：応用

要求を反復的に具体化するアジャイル開発を外部委託する。契約設計として最も適切な考え方はどれか。

ア：初日に全機能の詳細仕様を完全固定できなければ契約できない。

イ：要求が変わるので契約書は不要である。

ウ：固定された最終仕様だけに依存せず、役割分担、意思決定、反復の進め方、優先順位変更、受入・支払などの運営ルールを合意する。

エ：供給者だけが優先順位を決め、発注者は関与しない。

答え・解説

正答：ウ

ア：アジャイルでは段階的な要求具体化を前提とした契約設計が可能である。

イ：外部委託では役割・費用・責任などの合意が必要である。

ウ：IPAはアジャイル開発の外部委託向けモデル契約を公開し、仮説検証型の進め方とユーザ・ベンダの協働を重視している。

エ：顧客価値に関する意思決定へ発注者の関与が必要である。

総合解説：アジャイル調達では、変化を禁止するのではなく、変化を安全に扱う協働・意思決定のルールを契約へ落とし込む。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0141

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：基礎

調達の運営管理で継続的に行うこととして、最も適切なものはどれか。

ア：価格だけを監視し、品質や納期は見ない。

イ：進捗報告は受け取らず、最終成果物だけを見る。

ウ：契約締結後は納品日まで供給者と連絡しない。

エ：供給者の進捗・品質・適時性・安全性などのパフォーマンスを監視し、要求への適合を確認する。

答え・解説

正答：エ

ア：契約上の複数要求を管理する必要がある。

イ：遅延や品質問題を早期に把握できない。

ウ：問題の早期発見ができない。

エ：IPAシラバスは供給者のパフォーマンスの監視・レビューと、全要求事項へ適合させるための処置を求めている。

総合解説：調達管理では、契約締結を終点とせず、供給者の遂行状況を継続的に見える化して早期是正する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0142

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：基礎

検収の説明として、最も適切なものはどれか。

ア：検収は価格交渉だけを行う作業である。

イ：供給者が完成と言えば必ず受入とする。

ウ：納入日になったら内容を確認せず自動的に受入とする。

エ：納入された調達品が、合意した調達仕様書・受入条件に適合しているかを評価して受入可否を判断する。

答え・解説

正答：エ

ア：主目的は納入物の契約・仕様適合確認である。

イ：発注者側の合意した基準で確認する必要がある。

ウ：要求適合性を確認できない。

エ：IPAシラバスは納入された調達品が調達仕様書に適合しているかを評価して検収する能力を求めている。

総合解説：検収は、契約時に合意した要求を実際の納入物へ適用する最終的な適合確認であり、基準の事前明確化が重要である。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0143

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：基礎

供給者が契約した中間成果物を期限までに提出しない。最初の対応として最も適切なものはどれか。

ア：発注者側の影響を評価しない。

イ：未履行を記録せず、納期だけ秘密に延長する。

ウ：事実確認せず直ちに全契約を解除する。

エ：契約・事実・影響を確認し、供給者と原因・回復策を協議し、必要な是正や契約上の手続を進める。

答え・解説

正答：エ

ア：スケジュールや他調達への波及を評価する必要がある。

イ：契約・計画の透明性が失われる。

ウ：契約条件と影響を確認した上で適切な手続を取るべきである。

エ：IPAシラバスは契約の未履行を指摘し、双方協議の上で早期問題解決と回復を促す能力を求めている。

総合解説：契約未履行は、感情的に処理せず、契約根拠・原因・回復計画・影響を明確にして管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0144

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：標準

供給者は「進捗90%」と報告しているが、重要成果物のレビュー完了は50%にとどまる。最も適切な対応はどれか。

ア：レビュー未完了を進捗100%とみなす。

イ：進捗の算定基準と証拠を確認し、成果物・マイルストーン・残作業に基づいて実態を再評価する。

ウ：90%という数字をそのまま信じ、証拠は確認しない。

エ：報告値の矛盾を指摘せず、発注者側の進捗だけ書き換える。

答え・解説

正答：イ

ア：実態を反映しない。

イ：供給者パフォーマンスは報告値を受け取るだけでなく、契約上の成果と照合してレビューする必要がある。

ウ：遅延リスクを見落とす。

エ：管理情報の信頼性を損なう。

総合解説：供給者進捗は、客観的な成果物・完了基準・残作業と照合して実態を判断する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0145

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：標準

外部調達するサーバの納期が2週間遅れる見込みとなった。最も適切な対応はどれか。

ア：供給者の報告を削除して遅延がないことにする。

イ：サーバ調達だけの問題なので、他工程への影響は確認しない。

ウ：納期遅延をプロジェクト計画へ反映しない。

エ：後続作業・クリティカルパス・代替環境・追加コストへの影響を分析し、回復策と必要な変更を調整する。

答え・解説

正答：エ

ア：問題は解消しない。

イ：後続テストや移行へ波及する可能性がある。

ウ：実態と計画が乖離する。

エ：IPAシラバスは調達実行の遅れが与える影響を推定し、原因を分析する能力を求めている。

総合解説：調達遅延は契約単体でなく、ネットワーク全体への波及と代替策を評価して統合管理する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0146

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：標準

納入ソフトウェアは主要機能を満たすが、契約で必須とした監査ログ機能が欠落している。最も適切な対応はどれか。

ア：欠落機能を発注者が無償で実装し、供給者には知らせない。

イ：受入条件に照らして不適合を記録し、契約に従って修補・再納入・条件変更などの処理を協議する。

ウ：担当者の口頭承認だけで正式検収済みにする。

エ：主要機能が動くので監査ログ欠落は無条件で無視する。

答え・解説

正答：イ

ア：契約責任と変更管理が不明確になる。

イ：検収は調達仕様への適合性で判断し、未達は契約上の手続で処理する。

ウ：合意した受入基準と証拠を無視している。

エ：必須要求未達を放置することになる。

総合解説：検収で見つかった不適合は、重要度と契約条件に基づいて正式に処理し、受入状態を明確にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0147

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：標準

発注者都合で追加機能が必要になり、供給者から費用と納期の追加が提示された。最も適切な対応はどれか。

ア：元契約金額のまま無条件で追加対応を命じる。

イ：追加要求の必要性和影響見積りを確認し、契約変更手続に従ってスコープ・費用・納期・責任を合意する。

ウ：影響見積りを見ずに要求を撤回する。

エ：追加要求を口頭だけで依頼し、契約は変更しない。

答え・解説

正答：イ

ア：合意した契約範囲を超える可能性がある。

イ：IPAシラバスは調達の契約変更を交渉する能力を求めている。

ウ：価値とコストを比較して意思決定すべきである。

エ：後の責任・支払・納期で紛争になりやすい。

総合解説：調達変更は、発注者・供給者双方の影響を可視化し、正式な合意として契約と計画へ反映する。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0148

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：標準

品質不良が続く供給者から「今後注意する」という改善回答だけが提出された。最も適切な対応はどれか。

ア：不良件数を報告対象から外すよう依頼する。

イ：供給者の改善活動は発注者の管理対象外なので確認しない。

ウ：原因、具体的対策、責任者、期限、測定指標、再発防止の確認方法を含む改善計画を求め、その実施効果を追跡する。

エ：「注意する」で十分として問題を終結する。

答え・解説

正答：ウ

ア：品質を隠すだけである。

イ：契約要求の達成に影響するため監視対象である。

ウ：契約未履行や品質問題は、具体的な回復・改善の実行可能性を確認し、パフォーマンスとして監視する必要がある。

エ：再発防止の具体性と検証可能性がない。

総合解説：供給者改善は、原因と行動を具体化し、指標で有効性を確認できる状態にする。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0149

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：応用

納入物に軽微な未解決事項が残っているが、業務開始日は変更困難で、回避策も存在する。最も適切な判断はどれか。

ア：未解決事項が一つでもあれば影響に関係なく必ず契約解除する。

イ：契約・受入条件を確認し、残存リスク、影響、回避策、修補期限、責任を明確にした上で、許容可能なら正式な条件付き受入などを関係者と合意する。

ウ：業務開始が迫っているので未解決事項を記録せず受け入れる。

エ：供給者の口頭約束だけで無条件受入する。

答え・解説

正答：イ

ア：契約条件とリスクに応じた判断が必要である。

イ：受入判断は品質要求と契約条件、事業影響を統合して行い、例外を認めるなら条件と責任を明示する必要がある。

ウ：残存リスクと責任が不明確になる。

エ：修補期限や責任の追跡ができない。

総合解説：条件付き受入は例外的判断であり、残存リスクと修補義務を明文化し、適切な権限者の承認を得る。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01

0150

3-5 調達マネジメント > 調達管理・検収 | 難易度：応用

主要ベンダの最終納品が完了した。調達を管理上終結するための対応として最も適切なものはどれか。

ア：供給者評価を一切残さず、次案件に知見を引き継がない。

イ：契約変更履歴を全て削除する。

ウ：検収結果、未解決事項、支払条件、契約変更履歴、成果物・権利・引継ぎ、教訓を確認し、契約上の義務が満たされたことを記録する。

エ：ファイルが届いた時点で、検収や未解決事項を確認せず終結する。

答え・解説

正答：ウ

ア：将来の供給者選定・調達改善に活用できない。

イ：監査証跡と教訓が失われる。

ウ：調達管理は最終成果物受領だけでなく、契約義務・未決事項・引継ぎを確認して終結することが重要である。

エ：契約義務が完了したか確認できない。

総合解説：調達終結では、契約上の義務・検収・支払・引継ぎ・記録を整合させ、次の調達へ教訓を残す。

対象：2026年度 / 基準日 2026-10-01